24-36

公開書翰 第壹編

默軒學人小川忠之助著

發行所 草津 井筒商店

特18
429

○公開書翰第壹編

前口上

僕頃ろ感あり泰西に行ハるゝオプンレッター乃例に倣ひ在滬蟄下二三の人物ユ對し平素言ハんと欲する所のものを筆し茲に之を公にするおとゝなれぬ固より爬羅剔抉人の隠微を穿つて自ら快と爲すものに非す寔に時事僕を驅て止むなく茲に至らしめしものたるなり故に其名ハ公開書翰と稱し書簡の体ユものせしと雖を其實は時事と假つて人物を品ゝ人物を借りて時事を評せしも乃に外ならを時に滑稽乃熱血迸て或は敬を缺き或ハ禮を失するものなきにしも非すと雖とも是れ其人を貶せんとするの意に

非す尚ゐ其人の一人物として全からんことを望むの微衷に出で一ものたる也

若し夫れ人物は順序よ至ては随て感し随て筆せしものを以て其人を褒貶せ一ものなりと言必らずしも前後首尾はむ哉篇中の人物幸に諒せよ焉

明治廿六年癸巳孟夏下浣

於湖南僑居

默軒學人　小川忠之助識

○公開書翰第壹編目次

大越亨	君	一	丁
大東義徹	君	三	丁
江龍清雄	君	六	丁
林田勝九郎	君	十一	丁
岡田逸治郎	君	十三	丁
寺原長輝	君	十六	丁
松田宗壽	君	十八	丁
渡邊長謹	君	二十	丁
川路利恭	君	二十二	丁
遠藤宗義	君	二十四	丁
村上孚光	君	二十七	丁
藤島了穏	君	三十一	丁

中村不能齋君　三十四丁
佩香女史　三十七丁
河村專治君　三十九丁
中邑庄五良君　四十一丁
磯部龜吉君　四十三丁
藤田治郎右衛門君　四十五丁
谷口おせんね　四十七丁

◎公開書翰　第壹編

默軒學人　小川忠之助著

大越亨君

僕未ざ親しく足下の謦咳に接するの榮を得ず、故に足下の人となり如何は能く之を知らず。然れども足下が我滋賀縣に令尹となる已に年あり矣、平素の言行に於て、又施政上に於て、幾分か知らざるあきに非ず。

天璋と號する書家としては、一任世間に知らるゝにもせよ、僕未ざ良二千石の。。。

事に就ていへ、稍効を足下に仮すべきものあらむ、吁此一事のみ、寔に此一事而已、而かも辛ふじて此工事を遂ぐるに至りたる効蹟れ、足下よりは寧ろ熟涙淋漓の沿湖人民に其多くを嫁せんあり。

足下よ、足下は舊幕時代の代官として、寔に良吏あり、寔に能吏あり、何となれば、舊幕時代にも足下の如き温厚にして篤實ある、而かも無爲政事を執つて民を牧せしものあければ、ならず。然り只夫れ然るが故に立憲時代の牧民官としてれ、未だ良二千石たるの英名を博せんと難からんあり。

然れとも足下が良二千石たらるは、寔に足下の幸あり、見すや彼の安場福岡の前轍を、彼は實に九州探題を以て稱せられたり、西陲に雄視したり、敏腕家を以て聞へたり、而して彼が終りに果して奈何。夫れ正宗の銳、莫邪の利、誰れか之を珍重せさらむ、然れとも之等の銳利能く人を殺戮する丈けの、亦能く己れを傷つく、彼れ安場福岡の如きい實に己れの銳利を恃んで、其銳利爲めに自殺せし者にあらさや。足下幸にして此事あかりしは、寔に足下が這般銳利の手腕あきの致す所、足下たるもの宜しく千鍾を傾けて可あらんなり。

大東義徹君

湖南の妖物を以て、近江西郷を以て、枕流和尚を以て、明治の豪傑を以て、名聲天下に籍甚さる大東義徹君足下。

足下の聲望何ぞ夫れ著く天下に噴々として、而かを尚は重きを當世に置かれさるの太甚しきや。僕窃かに足下れ爲めに惜んで且を悲むあり。蓋し足下亦心に感々焉たるものあらむか。

人い言ふ、足下は狀貌魁偉なるの故を以て、若かく世人に買被られたり、肥大の腹便々たるの故を以て、温藉する所亦大ありと誤られたりと、吁何ぞ然らむ、吁何ぞ然らむ。

僕を以て之を觀る、足下い狀貌魁偉あるの丈け、温藉する所亦常人の得て端倪すへからさる外に在り寔に足下は能く自ら晦まし、亦能く自ら顯はす。其自ら顯はすに當てや、天下咸な噴々足下の尤物あるを稱す、其自ら晦ますに當てや、世人い見て以て妖物とあす。茲に於てか毀譽褒貶交も足下の一身に蒐る、天下の英俊に非さるよりは、寧ろ能く坂の如くなるを得む、譽褒說ぶに足らさるあり、毀貶痛

ひに足らさらんあり。
夫れ黯然として而して潜み、倏然として而して躍り、駸々然として而して虚に沖る、變化測られも、此れ之を龍と謂ふ。蓋し足下は龍あらむか、設し龍なりせば、寔に神にして且つ靈あらんあり。然とも神且靈あるものの、其肉以て食ふ可らす、其皮以て衣る可らず、羊豕魚鼈の以て食ぬべく、以て衣るべきに及ばざること萬々。
吁足下れ寔に龍なり、寔に神且靈あるものなり、安ぞ群望の噴々として、而うも當世に重きを置られさるを怪しまむ哉。
昔者孔子周に適き、禮を老子よ問ふ、既にして之を目するよ、龍を以てす、何ぞや、其言徒らに玄徹、其說徒らに脫凡、而して毫も當世に用ゆべきものあければあり。今足下の言、玄徹あること老子の如きものあるとなき也、又必らすしも脫凡の說、老子の如きもの、あるにあふさる也。而かも足下が世に處する言行の神變不可思議にして、得て端倪すべからざる、或時れ勇者の如く、或時れ智者の如く、或時れ廉潔の如く、或時れ妖物の如く、或時れ庶蕩の如く、或時は民蕩の如き、寔に是れ龍なり。足下にして設し終世龍と以て自ら居らんか、龍たる亦可ならんなり。只夫れ僕が足下の爲めに惜み且つ悲む如く、足下亦當世に意を得さるを悲み且つ愛へんか、宜く龍たる可らす。須らく人たる可き也。羊豕魚鼈の以て食ぬべく、以て衣るべき底の人たらさる可からざる也。
且つ夫れ天下百年以て龍あかるべし、一日も以て人なからさる可らす。矧んや立憲治世の今日に於てをや。足下以て如何と爲す。

江龍清雄君

僕足下に對して當世の事を言ぬは、自ら其野暮あるを知る、然れとも足下已に代議士たり、一任〇〇の力を藉つて、其地位を得たりとするも。僕豈に一言の足下に規するあからめやは。

聞け足下、代議士は天下の政を議するものなり、天下の政い公事あり、公事と一身の私を以て枉くるを許さず。故に一たび擧けられて代議士とあるもの、其議場に立つや、一点の私心を挟む可らず、毫も私情の爲めに己れを枉げざるを要す。夫れ心意と寔に不羈獨立あり、寔に自主自由なり、苟くも己れの良心に問ぬて疚しき所あら、整々堂々以て可を可とし、不可を不可とせよ、他の代議士属あ白票を投す、獨り毅然として青票を投するも可あり、衆人皆あ可と叫ふ、獨り侃々として不可と倡よ、寔に不可あし。何とあれば已れの心以て事の利害を忖度し、已れの智以て天下の理否を判斷し、已れの信以て確く執つて動かざるい、士たるものゝ美徳にして、抑も亦堂々たる代議士の本分あれば也。

獨り道般伏仰天地に愧ぢざるの熱裏に出です、衆人属あ白票を投するに當り、已れ或る情絆の爲めに、恐々然として青票を挟にし左右を顧みるの醜態からんか、衆人皆あ可と叫ふに當り、已れ或る約束の爲めに、追々焉として不可ありと唱ふるからんか、是れ已れを枉ぐるものにして、抑も亦人を欺き天を欺くものあり、士たるものゝ美徳何くに在る、代議士たるものゝ本分果して何れの處にか求めむ、足下自ら顧みて中心怳怳たるものあるさや否や。

昔者李華政事堂記を作つて曰く、君以て道を天に枉げ、道に地に反し、道に社稷に寇し、黎元に無道なる可らず、政堂以て之を議すると得、臣以て道に君に悖り、道に人に逆ひ、道を貨に鬻し、道を刑に亂り。一方の命を勉して王者の制を變す可らず、此堂以て之を易ふるを得云々と。夫れ議事堂は天下の公を議する所あり、一身の私を上下もる所に非ず代議士たるもの宜しく、眼中天下の利害休戚あるべく、須らく一身の情絆約束あ可らず。只正を正とし、邪を邪とし、直を直、曲を曲、是を是、非を非とし、已れの信する所を擧げ、確く執つて動かざるべし、他い顧るを要せず、苟くも斯くの如くんば豈に毅然たる大丈夫ならざや。

僕今擢拳干沙の當時に溯つて追窮すること得て爲さゞるべし、設し尚は足下にして女は已を說ぶもの〻爲めに容をり、士ゝ己を知る者の爲めに用へらる、予は只己れを知るものゝ爲めに盡すあるを知て、其他あるを知らずと答へしめん歟、足下抑も過てり矣。僕更に聲を大にし、言を厲して足下に敎へんなり。

夫れ鍾子期死して伯牙復た琴を彈せず、君王三顧の榮を荷ふて臥龍先生出てゝ相さり、士ゝ己れを知るもの〻爲めに其知遇に感し、鞠躬盡瘁する、洵とに人生の美事あり。然り美事たるの故を以て、事の理否を問はず、只其知遇に感し、其人の爲めに竭さんと言ひ、天下何事をか敢て爲すを忍ぶ可きあり。脅力兼ね拔ん玄攀跻輕捷の故を以て賊魁の善用する所とならば、強盜をも尚は敢て爲すを忍ぶに至らん也。天下豈に之をしも美事ありと稱贊せんや。今足下が擧げられて代議士となる、這般の例證と相距る果して幾許ぞ、足下尚は此般知遇に感じ、情絆約累と遂に脫し得られずと謂ふや。

且つ夫れ足下が擧げられて今日ある、是れ知遇の榮あるに非ざるあり、只〇〇が一時の權略足下れ如き〇用ゝ易た人物を〇〇して、藥籠中のものと爲せし迄あり、決して足下の用ゆべきを知つて、懇請する所ありしに非ざるなり。換言せば足下は土〇視せられたるもの

なり、機械的に〇用せられたるなり、恩もなければ慈もなく情もあし、蓋し足下自ら見るの明亦能く之を知らむ歟。自ら知つて尚は此情絆約累を脫し得ずと謂ふ、是れ士たるものゝ本分を辱しむるものに非ずして何ぞ、吁天下の恥辱旃れより大なるはなし。

足下にして設し中宵人定るの時、虛心胆懷想ひ一たび茲に至らば、安んぞ玄て今日の地位に在るべからざるを了知せむ。聞く足下は舊大和郡山の藩士なりと、果して然らば一たび藩主の爲めに祿を得たるものゝ祿の爲めに節を辱かしむべからざるの夙に知る所ならん、足下の爲めに圖るに、今日深く其職を辭するは、寔に事の宜きを得たるものならん歟。

然れども僕叨りに足下に辭職勿告を爲すものに非ず、止むなくんば速に從來の情絆約累を脫せよ、國家の爲めに圖つて忠あれとの一言を呈して、足下の反省を促さんあり。

人情或は從來の情絆約累を脫し難きものあらん、然れとも天下の公の爲めにい代へられざるあり、士たるものゝ本分を盡さん爲めには、過去のことは過去のことゝして罷らざる可らず。聞く君子は過つて改むるに憚らずと、又聞く君子の過ひ猶ほ蝕の如しを、足下にして豁然大悟茲に從來の失を改め、赤誠を天下に明にせんか、向後の足下と過去の足下に非

さる也。天下復た足下の過を改むるに憚らさる美徳を稱賛するを知つて、過去の過失を罪ふを知らさらんをや、豈に亦快心の事ならすや。

僕今揮筆するに臨み尚ほ一言之と復せんと欲せす、足下他くまでも區々葭莩の仁鴻毛の恩に感激して、退々焉蹰躇するあらむか、第三議會場來地に委したる足下の聲望は終生遂に輓回するの期あらふむ、今日は寔に一刀両斷の處置を爲すべきの時機なり、公の爲めに私を犠牲に供すべきの時運なりと、足下幸に反省する所あれ。

林田騰九郎君

僕代議士たるものゝ節を守り、公の爲めに鞠躬盡瘁すべきこと、已に業に江龍清雄氏に與ふるの書中に於て盡くせり、足下に向つてい復た此事を言いざるべし。蓋し足下は江龍氏と自ら其品を異にし、其棠を別にするを知ればあり。

只足下知るや否、天下の公議堂に立つて國家の利害休戚を論議するものい、常に旗幟を鮮明にし、苟も曖昧模稜の言行あるべからざるおとを。足下曾て近江新報紙上代議士の氣節と題し此事を論せしを駁せしことあり、當時辯護論駁頗る力めたりき。蓋し足下い足下自ら言ふ如く何れの政社にも加盟することなを、獨立不羈の運動を爲すの自由を有するものあふん、又名利ら爲めに節を變するが如き人物にも非ざるべし。只奈何せん、第四議會に於ける休會説提出の當時欠席したると、政府の意向質問發言撰定決議案に反對したるの兩件は、何とおく世人をして一種異様の感を惹起せしめたるを。勿論己れの良心よ顧みて疚しき所おく、又已れの信する所を確く執つて動かざる美徳は、足下に於て之れ有りしならん、而かも世人をして此間に疑團を抱かしめし足下の罪は竟に免かれさらむか。何とる

れば當時足下の言行頗る曖昧模稜にして、旗幟大に其鮮明を欠きたればなり。

然れども僕叨りに既往のことを窮追して足下を責むるものに非ず、足下自ら言ふ如く洵に伏仰天地に愧ぢざるれ言行ありしならば、希くは將來に於て此言を反古にすることあからんことを、否寧ろ此言の如く國家の公利公益の爲め、獻身的の奉仕を願はんことを、只之れ耳、只之れ耳、足下幸に自重せよ。

岡田逸治郎君

滋賀縣會議長として、又滋賀縣商業學校長としての岡田逸治郎君足下。

足下は縣會議長としてゐる代りに、商業學校長としてゐるに不適任なり。此言たる決して僕一家の言に非ず、已に昨年の縣會議場に於て、滋賀鎮臺台麓酋長中邑正五郎氏も亦實に斯く言へり、岡田君の顔は誰れが見ても議長としては能く似合ふも、商業學校長の顔でないと、眞摯朴訥の言綽ち得て妙なり、蓋し世人一般に見る所も亦若かくあらむ也。

抑人には智に能あり不能あり、才に長あり短あり、能く己れの能と長とを知り、之に適合する職を擇んで從事する、此れ天職を務むるなり。不能と短とを顧みず、只己れの心に適する儘、意の儘と儘、擇ぶなくして或る職に從事する、之れ天職を空うするなり。天職を空うするは實に天分を完ふせざるもの、人たるもの、豈に斯天分を完ふせずして可なるんや。

且つ夫れ生民あつて以來、天の斯民に與ふるの業務百且つ千にして倘ほ足らず、士あり、

農あり、工あり、商あり、僧あり、學者あり、政治家あり、法律家あり、經濟家あり、一々具すべからず。天の一視同仁なる、能く新民をして其能と其長とにより、凡百の業務中其一を擇ばしめんと欲す、吁人たるもの自ら視るの明、能く之を察せん也。今僕を以て足下を見る、足下の膽略一地方の經濟を料理するに餘りあつて、而かも足下の才智區々たる一校を統御するに足らず、足下の德望縣下に隆々たるに關せず、而かも足下の學識能く育英の任に膺るに堪へず。盖し足下亦自ら見るの明能く之を知らん也。設し之を知らずと言はゝ、足下は是れ明なきものあり、知つて而かも此任に膺りたりと言はゝ、足下は是れ智なきものあらん也。

盖し惟ふに足下は寔に溫厚篤實の君子人あり、自ら商業學校長たるの任に堪へざるを知ると雖も、數年以來此校興廢の紛論、又足下四圍の境遇狀勢、足下の如き德望家を擧げずんば、此校を整理する能はずして、止むなく足下其命を拜するに至りたるならむ歟、足下何爲れぞ愚へあらむ。

然れとも負下は未だ居り易からず、下流謗議多しとかや。足下が一たび此任に就てより、彼の足下の人となりを知らざるもの之、足下を以て利欲の爲めに此命を拜したりと爲し、

嫉妬心深きを小人又失意の鼠輩は、見て以て奇貨居るべしと爲し、益足下を排擠せんとす、茲に於てか誹議四もに起る。足下にして設し眞に自ら知るの明あり、又自ら處するの智ありせば、今日は寔に自ら退くの時運ならん也。且つ夫れ足下既に縣會議長の榮職を擔へり、足下の隆々たる聲望は、野洲川の流と共に百代竭せざるべし。此時に當り商業學校長の職何にか有らん、毫も足下の聲望に輕重軒輊する所なれのみあらず、適以て足下の德に一の瑕瑾を添ふるに足らん也。

故に僕敢て切言す、足下速に商業學校長の任を拋棄て、適當なる後任者を薦めよと、足下以て如何と爲す。

寺原長輝君

僕窃に以爲らく毀譽褒貶身に集るものは聲望自ら隆々たるものあり、此故に毀貶未だ以て其人を傷くるに足らず、譽褒未だ以て其人を揚ぐるに足らずと。

足下の來つて滋賀縣に書記官たるや已に年あり矣、此間毀譽褒貶の足下の身に集りしこと果して幾許ぞ、僕不明未だ其著しきもの有るを聞かず。足下の如き滋賀縣高等官中寔に珍らしき人物と爲す、啻に我滋賀縣のみあらず、全國の官吏中蓋し有數の人物あらんか。若し僕が持説を推して足下を論せば、足下も正に隆々たる聲望なき人物あらん、所謂沈香も燒かず屁も放たざる人物なるかん。然れとも足下の一任隆々たる聲望なきにもせよ、幾分の聲望あることは僕の知る所、殊に縣會議員よりの氣の受け最も宜しと聞く、思ふに足下い頗る人生處世の道に長する者あらんか非邪。

乞ふ記取せよ足下、丈夫一大快心のあとは、芳名を竹帛に垂るゝこと能はすんば、須らく臭名を千載に流すに在り。彼の碌々として此世に生れ、屹々として棺を蓋ふが如きは、固と男兒の恥つる所。足下たるもの、徒らに姑息、徒らに瀰縫、徒らに外觀を衒ふの治器に

のみ汲々たる可らず、宜しく僕等をして其穴を窺はしめ、其理を認めしむる丈けの手腕を揮ふを要すべし。

之を要するに、足下は他人をして其穴を窺はしめさる丈け足下の穴あり、僕等をして其理を認めしめさる丈け足下の理あり。古語に曰く觀過斯知仁と、彼王孫の布被、陳仲子の螬李を擧ふが如きは、僕の取らさる所、抑も亦古哲の取らさる所なり、足下幸に三たび之を思へ。

松田宗壽君

足下滋賀縣の宇引を以て自ら鼻を高ふすることは僕夙に之を聞けり、議案辨明委員として多年縣會議場に立ち、巧に五十二名の議員を掌上に籠弄して、得々たる伎倆は僕夙に之を見たり、不幸にして僕未だ其他を見聞せず。

夫れ學識あつて才智の足らざるもの、往々機に臨み變に應ずるの器に匱し、才智餘りあつて學識に富まざるもの、往々にして其身を危ふす、是れ古今の通患なり。僕今足下を見るに、足下之を定に才智餘りありて學識に乏ぼし、徒らに臨機應變誤魔化しの的の辯口を以て、議場を切り抜くる才器あつて、而して着實眞摯理否を辨析し、人を心服せしむるの智能なし。徒らに不必用の答辨に一時間餘りの長舌を弄し、而かも滿場聞然たらしむるの伎倆あつて、而して他をして赤心を足下の腹中に置かしむるの誠忠なし。

之を要するに、足下の眼中には順道あるし標道あるを而已、足下の胸裏には才智あるのみ、學識乏ぼし。然れども僕今足下に對して、直に其長所を乘てよとの注文せざるへし、只才智餘りありて學識に富まざるものは、往々にして其身を危ふするの處あれば、餘まりよ勞に乘じて切り廻り過ぐる莫れと、只此一言耳。思ふに兎事たる今日僕が規を待たず、足下客年の議場に於ける失敗に鑑み、自ら慚然大悟せしものならんあり。

渡邊長謙君

足下が山梨縣參事官より滋賀縣參事官に榮轉し來りたるや、僅に旬月前に在り、故に僕未だ足下の人となりを如何ぞ能く之を知らさるも、昔て竹渭樓上互に刺を通ぜさる時、稍足下の風采を窺ひ得たり。足下は定に眞摯率直の人なり、飾り氣のなき人あり、語を換へて言へば、所謂官吏氣質のなき男あり。僕實に足下の人と爲りを愛す、官吏社會得易すからさる好漠として愛す。

足下は最と無頓着に、最と無造作に、以后どうか宜しうと、這般準爾の言中、如何なる意味を含蓄するかを僕れ知らざる所、兎に角僕い普通の挨拶として之を聞けり。何ぞ其言の眞摯率直にして飾り氣の無きや、官吏社會中洒々落々たるものに非らざるよりは、決して斯くの如をあらさらん也。

聞く足下い現大藏大臣無邊俠禪の甥ありと、左れば面壁十年の悟道い去來知らさ、兎に角幾分か其衣鉢を傳へたるものならんか。人い稱す足下は頗る理財の才に長すと、今や我滋賀縣百般の財務能く整理す、敢て理財に長する大才、世人が噴々稱する足下の如き人物を

要せすとも亦可あらん也。然れとも理財のことたる國家經綸の一大要素、一日も以て輕々に附す可らず。足下にして果して世人の稱道をる如く、理財の才に長するものありせば、我滋賀縣に足下を得たるは實に地方の幸福なり。

且つ又僕性疎放、理財の才に至つてど殊に迂、赤貧實に洗ふが如し。足下閑あるの日、高門と叩て教を乞ふあとをらん、どうか其時は宜しう、敢て尊嚴を冒す、多罪々々。

川路利恭君

足下警視より轉して滋賀縣の警部長とある、亦旬月前に在り、故に僕未だ足下が腰間に横ふる所の三尺の秋水、果して鋭きや否を知らず。

然れども聞く足下は故川路大警視の家を繼ぐものありと、敬門由來孝子を出だす、蓋し併屋はあらん也。

偖問す足下一たび湖南の地に來つて幾多感慨を惹起せし、於戲美なる哉比良の雪、於戲麗なる哉鴨浦の波、而して驚天動地の一凶變固らざりき此地に起らむとは、幸にして國家れ安きは猶ほ此山の如し、獨り去り且つ來るものゝ遂に此水の如きか噫。

蓋し足下這般感慨一番せしものあらむか、然れども足下心を安んせよ、我縣下由來易治の地と稱す、昨春に於ける海南西陲の暗雲は夢にだも見るを得ず、（敢て足下に希望するに非す）風伯如何に猛るとも、激灩たる琵湖には狂瀾怒濤澎湃として天を捲くの奇觀を容れざるあらん。狗盜鼠賊時に良民を劫かす無きに非ざるも、而かも國事に奔走するものは勘き也

、目に一丁字なき浮浪の徒れ、往々出沒することあるも、而かもステッキを振り廻はすの壯士は、幾んど絶無と稱して可あり。設し足下が宰て整下に振り廻はしたる手腕を以て之に望まば、蓋し牛刀割雞底の概あらん、抑も亦收將昔日回瀾手、閑釣琶湖六々鱗の風流もあらん也。

若し夫れ博徒狩りゴロツキ退治に至つては、宰て龍門警部長の部下に在つて敏腕を揮ひし、前大津警察署長現警務課長有川貞壽氏の在るあり、足下只手を拱して可ならんあり。

遠藤宗義君

前滋賀縣尋常師範學校長現任滋賀縣屬内務部第一課長遠藤宗義君足下。

曩きに足下ダ非職の厥命を蒙むるや、寔に寝耳に水の感ありき、寔に晴天落雷の概ありき、足下出張先きにて定めて猶一驚、轉一轉せしならん。

道路説を爲すものあり曰く、足下ダ非職を命せられしは、昨秋京都に於ける大日本私立教育大會の席上、足下文部省の施政に對て演説せし其言、慮りあくも當路者の叓諱に觸れ、此祟りを爲しぬと。僕其然るや否を知らず、設し果して然りとせば、僕足下を弔するの情更に深からざるを得ず。

物言へば唇寒むし秋の風、由來口い禍の門と稱す、矧んや未だ言論の自由を有せざる我國人をや、又矧んや、口舌を欲束せらるゝ教職に在るの人をや。僕平素言論を事とするの故を以て、足下が此奇禍に遭ふを見、轉た感慨の胸に迫る深きを覺ふ。

然れとも足下自ら寛ふせよ、我文部省内の空氣腐敗するや日久し矣、多年次官の椅子を占め居たる温厚の人辻君すら、朋黨排擠の結果、自ら其地位を去らざるを得さるの不幸を來

たるを見れば、足下が一言の過、適此奇禍を速きたるを怪まさらん也。

道幾地に委し姿俟道に横はるの今日、一任足下が慷慨の辭を爲さゝるも、早晩遣般のことならん也。適率先して奇禍を速にし、身を犧牲に供したるは、寧ろ足下の美徳として稱揚せべきものならんか。由來天下公論の在るあり、世上具眼の士何ぞ限らん、足下乞ふ自ら寛ふせよ。

只僕足下の爲めに取らさるものは、足下自ら卑ふして滋賀縣屬を拜命したること是れなり、奏任待遇の地位より下りたるおと是れあり、判任の地位に下りたるおと是れあり、年俸六百圓の俸給を下げて四級俸月額四拾圓の内務部第一課長と化したること是れあり。勿論内務部第一課と言へば、各省の總務局あり、地方廳内最も權勢のある所、故に之と以て尋常師範學校長の地位に對するも大なる軒輊あし、又奏任待遇と云ひ、判任と云ひ、僕等天爵を尊ふもの、眼中には、共に是れ蜘蛛中に棲息せる蜉蝣の上下するを見ると一般、敢て尊卑なし。

然れとも足下が左遷より下班に下りたるは事實なり、然り此事實は寔に士たるもの、恥づる所、苟くも自尊の氣概を有するあり、之を爲すを敢てせず。足下にして設し士たるもの、名を辱かしめば、足下なるもの宜しく嚴穴の士を以

て自ら居るべき也、五柳先生を以て自ら處すべき也。

然れとも又足下に去て、十三月仕へざれ〻吊す、予が自ら出で〻仕ふるは、聊か寸効を國家に竭さんことを思へればなり、嚴穴の士を以て自ら居るは、予が性情の許さゞる所なりと言ふあらしめんか。設し又僕や猶來僕貧の資是れ急なり、敢て地位の尊卑如何を顧みるの暇なしと言ふあらしめん、吁僕復た何をか言はん、吁僕復た何をか言はむ。

僕今搦筆すゝに臨み、只一言足下の注意を喚起すべきものあり。内務部第一課長の任たる、固と位卑ふして責重し。嚮さに小島鋼次郎氏該課長となつて、爲めに青くあり赤くあれり、後に鶴田正義氏第一課長となつて、頻邊の肉爲めに落ちたること三寸、松田宗壽氏の誤魔化し的敏腕、僅に切て抜々しと雖も、遂に失敗を以て罷れり、足下幸に自愛せよ。

村上孚光君

僕方今の師範學制度に不平あるや久し矣、其徒らに器械的教育の末に流れ、彼の人の子を賊ふを慨するや年有り焉。

蓋し人生感慨の切なる、自ら其境遇に處し、自ら經歴する所ならん。僕曾て往年島根縣師範學校に入つて學ぬ所ありき、彼の制度一變し、尋常師範學校と改稱せらるゝに當つてや、時の文部大臣森子は、非常の英斷(?)を以て、學校を軍隊組織と爲しぬ。當時其言に曰く、師範生徒は宜しく嚴厳從順規律此三者を保つの素を養ひさるべからず、之を養ふには學校を以て軍隊組織に變するを要すと、何ぞ夫れ其聲の大にして其名の美あるや。然れとも爾來森子が期する所の實ハ果して擧がりしか、當時地方の教育者輩只大臣の意を迎合するに急なる、深く將來を計圖する所なく、一朝にして舊來の制度を打破し、名を嚴厳從順規律の三者に假つて、俄かに壓制束縛の嚴則を設け、逃ふもの は毫も假借する所なし、爲めに校内殆んど目を以てするに至る。茲に於て僕一身を犧牲にし、屢々校長幷事等に迫つて論議する所あり、而かも毫も須ゆらるゝ所あかりき。偶一日

全校生徒舉つて不穩の所爲に及ぶ、僕實に之れが首謀者に非らざりき。然るに僕當時の位地い、遂に首魁と認定られ、劈頭第一着に退校を命せられぬ。此事一たび起つてより、連日の新聞紙上日として當路者の處置を痛論せざるいあく、全國れ新聞紙亦皆之を傳ふるに及び。岡山縣に、和歌山縣に、其他各地に師範學校騷動あるもの頻々として起り、大に當路者の頭腦を痛ましめたりき。是れ何ぞや、蓋し種々の基因ありしに由ると雖も、主ヒとして一朝變革の急ありし反動たらずんばあらず。

其後數年來に各府縣とも這般騷擾の迹を絶ちたるも、果して當初森子が期せし所の實蹟は擧がりしや。制度改革後の生徒は、豫め其順制束縛を甘受するの故を以て入學せし者なれば、所謂從順の氣象は能く養成せられたり。然れども其威嚴と云ひ、從順と云ひ、將た規律と云ひ、果して能く人の師範とあるを可きもの、具備すべき完全のものを發ひ得たる乎。其威嚴あるもの、虚威に流れずんば暴慢と化し、其從順あるもの、卑屈とならずんば怯懦となり、其規律を守ると稱するも陰ゝ結果れ、躰裁と飾るの人とならずんば、徒らに器械的の人物となり了す。見よ方今師範學校を卒業し、間ゝ小學校に訓導たるものを、多くい皆這般教者の外に出でざる、憐むべき人物ならざるはなし。彼の自ら持する方正に、

自ら尊ぶ高尚に、自ら力むる敢爲に、毅然凜然確固不拔の氣象を有し、進んでは國家の教育を両肩に擔ひ、退ひては德望を一鄉に負ふの、眞正教育家よ至つてい果して能く幾人かある、吁器械的教育の結果豈に憐まざらん哉。

之を要するに彼の徒らに嚴峻ある法則に由り、器械的に養成したるものい、其規律や眞正の規律に非ず、其威嚴從順や眞正の威嚴從順に非ず。假令ば猶ほ法律を以て支配せらるゝ被治者の如し、其能く命に從ふい、是れ治者其人に心服するに非ず、寔に如斯ならざれば、社會に立つ能はざるを知れバあり。其趣を異にす。苟くも眞正有爲なる教育家を發成せんと欲せば、力めて生徒の身体を束縛せらしむるを要す、勉めて生徒の心意を自由にして物に怯するなく臆する所あらしむるを要す。心意自由にして以て發成せらるゝ所以のものは、道義始めて以て之を導くべし、威嚴從順の美德始めて以て發成せらるべし。身体束縛せらるゝ所あらしむべし、茲に始めて心境瞥然たるべし、茲に始めて端正ある規律も保つことも得べし。然るを何ぞ獨り師範學校——則ち人材師範たるべきものを養成するの學校にして、教育本來の方針を棄だし、人を心服せしむる能はざる法律的主義を先にして、生徒の德性を涵養せしむべき道義的主義を後にするや、之をしも寃屈異處と

異なせと謂はずして、將た何にをか冠履其處を異にすると謂はむ。

夫れ君子は本を務む、本立て道生ずと。嗚呼道義を以て其本を務むゝを是れ爲さず、徒らに法則の末に齷齪として、而かも有爲の教育家を養成せんとす。方今の師範學制度たる、抑も誤矣、抑も誤矣。

然れとも此事たる、獨り今日の當路施政者に道ふべし、以て足下を責むべからず。只足下今や職に滋賀縣尋常師範學校長の任に在り、足下にして設し僕と感を同ふするものあらば、切めて這般器械的制度の範圍内にても、成るべく其本を務め、徒らに其末に流れざらんことを是れ力めよ。

聞く足下は本縣に赴任せざる以前は、山梨縣尋常中學校長の職に在りしと。然らば足下が師範學校長の職務に執掌する日尚は淺し、事務多端未だ思ひを茲に致さゞるものあらん歟、敢て微衷を吐露して足下の參考に供す、豈に難きを足下に責むると言ふ可けんや、蓋し深く感慨の胸に迫るものあればなり、足下幸に之を諒せよ。

藤島了穩君

足下頃者佛國文部兼美術卿よりオフイシエー、グカデミーの學位記章を領受せり、僕足下一身の榮を視すると同時に、我國桑門の爲め之を賀す。

足下、僕情ら方今に宗教社會を觀察するに、佛教はや事、日に非にして、而かも他日に有望あるものはあしと。夫れ空海成佛し、親鸞寂滅して以來數百千年、桑門復た一偉人を出だなさず。世の澆季に向へる、破戒の極頂、奔名走利の緇衣輩滔々として俗界の潮流を趁ひ、徒らに醉生夢死せるのみ、吁是れ事日に非あるものに非ずして何ぞや。然れとも翻つて他方泰西の情況を見は如何、文物次第に進歩し、格物致知の學大に開けてより、基督教の教旨往々荒誕無稽を失するを發見し、學理を講ずるもの益々之を擯斥すると同時に、佛教の教旨深淵玄微にして、一のサイエンスとして講ずるの價値あることを知り、現にヲルゴット氏の如き、又目下我國漫遊中のフォンデス氏の如き、此等耶蘇教國に人と爲りたる英俊、深く佛教に歸依するに至り、尚や漸く海外に傳播するの形勢あるに非ずや、是れ僕が此説ある所以あり。更に語を換へて言へば、佛教も我邦に衰微の色ありて、海外に

隆盛の兆を顯はせるもの也。而して其衰微の色あるもの、是れ佛敎其物の罪に非ずして、實に僧侶素行の修らざる罪あり。其隆盛の兆あるもれ、必らずしも歸依者の多きに非ずして、實に有識者の之を講究せる價値を認めざるに在り。然らバ方今の所謂名僧知識と稱せらるゝものハ、須らく茲に着目するを要す。乃ち内に向ては主として僧侶の素行を責め、外に對しては宜しく一の學問として之を擴張せざる可らず、足下以て奈何と爲す。

聞く足下今や僻阪に隱れ、門を杜ぢて出でずと。抑も足下方今我國開闢社會の惡弊に嫉する所あり、以て自ら潔くするの意か、將た又靡に佛國に在つて名聲を博したれバ、我が能事既に畢れりと爲すに由る歟。設し其意後者に在らずして前者に在りとせば、足下は佛者の所謂衆生を濟度するの本旨を守らざるものなり。如し又其意後者に在つて前者に在らずとせば、僕足下が學位記章を得たるを以て、足下の爲めに之を榮とす可し、未だ桑門の爲めに之を榮とせざらん也。

夫れ足下が世を慨し、獨り自ら潔ふせんとする、其光風霽月の襟懷や、寔に羨すべく洵に敬す可し。然れども今日英才逸識、足下の如き人を俟たずして、將た何人か潮頭に立つて、此滔々たる頽瀾を回らすものぞ。足下寔に天の足下に與ふる所以のものを知らば、今日

い是れ獨り一身を潔くすべきの秋に非ざる也。僕元來世の風潮を趁ふて浮沈するものを惡む、然れども又滄浪の水清めば以て我纓を洗ふべく、濁らバ以て我足を洗ふべしと爲す底の人物を好まず、只願ふ潮頭に立脚て回瀾の大手腕を揮ふの一億人顯出せんことを是れなり。此事たる獨り宗敎界に望むのミならず、政界にも亦之を望む、而して僕今日の宗敎界に望むことや最も切なり。

次に足下が學位記章を得たるや、寔に足下の榮あり、往年足下が錫を佛國に駐むるや、佛人として佛敎の玄微深淵の敎旨なることを、知らしめたる効蹟や實に偉且大あり。然れども足下尙ほ春秋に富む、今後大に爲すべきの事業い多し、未ざ之を以て我能事茲に畢れりと爲すを可らず。聞く本年九月十一日より米國シカゴ府に萬國宗敎大會議を開き、大に宗敎上の論議を闘はせ、玄を闡き微を明かにする所あらんとすと。寔に足下の大手腕を揮ふは斯時なる哉、斯時なる哉。好機失ふべからず、良會再び難し、足下何ぞ亟かに火輪に駕し、鯨濤を破つて渉航せざる。足下行て邪敎異端を喝破し、以て釋迦牟尼佛の光彩を世界萬邦に輝かす、亦是れ一大快心のあとあらずとせむ哉、吁足下以て奈何と爲す。

中村不能齋君

僕足下の盛名を聞き、足下の風采を敬慕するや久し矣、不幸未だ謦咳に接して親しく教を乞ふの榮を得ず、之を遺憾と爲す。

聞を足下深く柴扉を鎖ざし、足、門を出でざる三十年。晨に起き夜半に寢ね、日夜孜々として眼を古今の經史に曉らし、閑あれば手に隨ひて評隲を、心に任かせて謄寫す。其評隲するもの、謄寫するもの、積んで等身に迫る。古典一として究めざるなく、該博強記當世の活字引を以て稱せらるゝと。吁足下の風采何ぞ脫凡高邁よしや。試に足下を以て之を秦漢唐宋の世に求む、尙は多く其匹儔を見ず、矧んや現今澆季の世に於てをや。足下は寔に砂中の金、石中の玉ならんかな。其光や煌々、其聲や鏘々。

然れども僕未だ足下の爲めに惜んで止まざるものあり、夫れ足下の學や己れの爲めにするに在つて、人の爲めにするに在らざるは寔に善し矣、世の學問を爲すもの、須らく斯くの如くあらざる可からざらんなり。然れども只己の爲めにするを主として、他を忘れ世と隔絕するに至つては是れ浮屠氏のこと、世の學者れ未だ以て如斯ある可らず。夫れ學者は世の耳目あり、木鐸あり、先導者なり、抑亦潮頭に立つべきの人あり、己れの學ぶ所知る所は、以て人に敎へ且つ之と導かざる可らず、是れ寔に天の學者に與ふる職分、深く秘し深く藏し、以て顧はれざらんことを求むるは、抑も天職に悖るもの矣。吁足下果きて此學者たるの天職を盡くし得たる乎。數十年蘊蓄せる所の胸中の書を世間に公にし得たる乎。勿論自ら沽ることに汲々たるの古聖の擯斥する所、僕亦之を以て足下を責むるものに非ず。只足下が獨り己の爲めにするを主として、他を忘れ世と自ら隔絕するに至つてゐ、僕深く足下の爲めに惜んで止まざる也。

足下殊に知らずや、方今我邦には塗抹博士あるものあり、天狗博士なるものあり、叨りに忠臣義士を埋却し去り、漫に奇說怪談を事とし、自ら名を衒らひ、聲譽を沽んことに、營々日も亦足らざるおとを。蓋し天下具眼の士れ其欺瞞する所と爲らざるも、江湖の廣き旨君何ぞ限らむ、憐むべし博士と稱する鬼面の爲めに欺かされて、五里霧中に彷徨するもの滔々皆是。足下何ぞ此時に當つて大聲叱咤、彼等の鬼面を剝き、彼等れ心膽をして寒からしめ、且つ人をして這般五里霧中より救濟するの勢を取らざる。今の世足下の如き活字

引を呼び起さずんば、我大八洲の地數年ならずして暗國世界に化せんあり。失れ大旱に當つて雲霓を望む、誰れか蘇生の思ひを爲さゝるものあらむ。足下乞ふ雲霓となつて、沛然たる甘雨を降らせ、蘇生の思を爲すものは豈に翹だ僕一人のみと言はむ哉、敢て嘱す敢て嘱す。

佩香女史

敢て細井夫人佩香女史に啓す、僕毎に以爲く紅蘭の星巖翁に於けるは、古今罕に見る所の好匹偶ありと。今女史れ鐵樹君に於るは、何ぞ失れ相似るの太甚しき哉。鐵樹君の詩才富膽ある、未だ能く星巖を凌ぐに至らずと雖も、亦是れ當世の才物なり、而して女史亦詩と書とに巧におて、實に之れが配たり。膽大剛復有骨男兒をして後へに瞠若たらしむる、紅閨の活氣は或は無からん、而かも文壇に立ちて沈淫醲郁含英咀華底の辭を吐出するに至つては、蓋し大に讓らざるものあらんか。謂つべし當世得易すからざるの好配あすと。」

僕未ざ女史夫妻に親炙せずと雖も、時に夫妻相携へて拾翠の遊を試み、甚殺して詩と文とあるものを見る、人をして幾んど羨殺妬殺せしむる焉のものあり。當に女史夫妻は好配あるのみあらず、女史の家内は寔に愉快の家内なるもの、猶ほ僕れみあらざらんあり。

夫れ好匹偶は人生の至樂、愉快なる家内は生活間の天國なり、人間苟くも好匹偶を得て、而して愉快なる家内を有す、王侯の貴、猗頓の富復た何ぞ旃に加へん。然れども高明の家

い鬼常に其室を瞰ふ、櫺門古より譏譴の入る所となり、才俊今に人の嫉む所と爲る。女史設し好匹偶と愉快ある家内と世に衒はんとして、漫に文人得意とする皇張誇大の辞を弄し、夫妻名を連ぬて新聞紙上之れ見よがしに、お惚的の艶詞を公にするが如きことあらじか、恬淡の人は見て以て一笑に附せん、熱情の人は鼻を掩ふて唾罵せん。苟くも淑徳を重んずる女性い、大に慮る所あくんばあらざらんあり。女史以て如何と爲す。

河村專治君

今春再び縣會議員てふ空前絶後の名譽職を得て、始めて臙脂を泰山の安きに置れたる河村專治君足下。

足下い昨春の総撰擧に、切角徳利運動を爲せし甲斐もあら惜々あや、途に落第生と爲つて、久しく郷里堅田の濱に呻吟し玉ひた。然れとも春燕秋雁鳴呼時なる哉時なる哉、足下再び落雁を眼前に賞し玉ふの秋は來よりり。柳原豊氏病を以て辭し、其補欠として足下は再び議員に擧げられぬ。之を東隅に失して桑楡に收むとは、実れ足下の謂ひ乎非邪。

僕代議士たるもの當に其旗幟を鮮明あらしめざる可らざることい、已に林田代議士に與ふるの書より於て之を論をせり、敢て復た贅せず。只足下に望む所い、常に腰の直からんあと是れ也。議長大聲叱呼可否を起立に徴す、足下起たんと欲して起たず、着席せんと欲して着席せず、半ば腰を曲げて逡巡躊躇爲す所を知らす、人をして殆んど可否何れに屬するかを疑はしめし、彼の先年縣廳移轉論採決の時の如く、今后尚は斯る曖昧糢稜の行爲あらんか、中腰議員と稱は遂に足下の身邊を脱せざらんなり。僕勿論足下に對して、番外辨明

委員の保證者となれとは慫慂せざるべし、又一もなを二もおく只攻撃を事として、快と爲すもれ、味方となり、陽に剛骨を裝へとも勿誘せざる可し。其彦根藩に寫せんも、大津派に左袒せんも、只是れ足下良心の趣く儘あり。自ら問ぬて正と爲し、直と爲し、是と爲さば、其信ずる所に向つて左袒もすべし、贊成もすべし、辨論するも可あり、沈默するも亦不可 あし。只夫れ依然たる中腰ならんには、足下の聲望は愈々倍々地に墜ちん。而して足下自らをを地に墜さんも、之と挽回せんも、實に今秋の舞臺に在り、僕謹んで足下の行爲を拜見せん。足下乞ふ臟腑を泰山の安きに置け、至囑々々。

中邑庄五良君

台麓會長靜山中邑庄五良笠臣祐義殿足下、足下曩て近江新報に書を投ぜて、自ら台麓會長笠臣祐義と呼べり。寔に足下の名門の苗裔、斗大の膽能を乾坤を呑吐す、而のみ台麓會長ある、いい、いいみし稱號を以て自ら甘んじ、且つ笠臣祐義と呼んで自ら道る、足下が如何に當世に平あらざるかを知る。

然れとも足下能く聞け、時運の變遷い人力の得て左右すべき所に非ず。如何に足下が祖先金革の功を藉ひ、大に爲をなさんとするも、徒らに山王祭の日、告朔の餼羊を守るの外用ゆるに要あき也。光の名刀亦何をか爲さん、徒らに甲冑衆故に足下とるるの今日宜しく、靜山を以て自ら居るべし、須らく笠臣祐義を以て自ら居るべし、可らず。適意湖山の煙霞を吸ふて、陰懷を遣ることを可とす、漫に古英雄と擧んで、野心を挾むは不可なり。然らずんは足下遂に狂せん也。

足下縣會議員となるもの前後數年、其議場に立つや、破鐘大の聲を放つて、馬鹿野郎と叫び、奴輩と罵り、以て反對者を駁するの常套語と爲す。茲に於て乎人あり曰く、足下是れ

狂すると也と。僕未だ其然るを信せず、信ぜずと雖も、僕は寧ろ足下の狂するを説ぶものなり。

夫れ大奸い忠の如く、大才は狂に近し。足下の眞摯直情なる、彼の狂に近き奇矯の言を放つあるや、必らず常に忠に似たるの大奸、自ら私利を逞ふし、僻邪を行はんとするの時よ在ま。足下い定に讒謗の荷方斬馬剣なり、大盛叱咤他を喝破して罵倒し尽すの所、痛絶快絶人をして思はず唾壺と破碎せしむ。僕豈に足下が讒謗よ狂するを説はざらん哉。然れとも僕平素に於てい、足下が頗る眞面目あらんことを望む、甚だ大人氣あらんおとを望む。彼の隼光の刀を撫して、徒らに慨然たるものあるが如きは、僕の大に取らざる所なり。故に曰く讒謗に立つれ日い狂を以てい遂に居る勿れと。

磯部龜吉君

足下僕常に人よ語つて曰く、琶湖百年以て源五郎鮒なるべし、滋賀縣會一日も以て磯部龜吉ある好漢あらる可らずと。

夫れ松江の鱸、吳江の蓴菜、古來名物を以て淡土と稱せらる、我朝亦琵琶の鮒、明石の鯛、夙に名物を以て世に噴々たり。若し夫れ勝地に名物あり、以て倍勝地の光を輝かするものなりとせば、國に名物あるは、是れ其國の光を輝かすものに非すして何ぞ。足下は寔に滋賀縣會の名物あり、否な江州の名物なり。足下にして設し江州に生れずんば、滋賀縣會に此名物なき也、滋賀縣會に此名物微りせば、是れ江州に此名物あき也。謂つべし足下は江州の名物にして、而かも源五郎鮒と共に相竝んで、江州の名を全國よ輝かすものありと。

然れとも吁今や此名物已に亡し矣、不幸ある哉足下い昨春の總撰挙に落第生と爲れり、爾來茲に一年有半、足下の音信杳として聞くなし、江州の爲め豈に惜まざるを得んや。

誰れか道よ台麓酋長中邑庄五良の在るあり、我江州安ぞ名物に匿しからんやと。夫れ彼れは鯇あり、亦江州一れ名物たるには妨けず。然れとも鯇何ぞ鮒に敵せん、假令鯇あるも琶

湖の名は沒せず、鮒ある爰に琵湖の名煙滅せんとす。台慮固長ある足下にして無き、是れ滋賀縣會と名物あると也、抑も亦江州に名物あると也。僕昨冬の縣會を傍聽きて、實に少一人の咸と慾起し、江州の爲めに之を悲みぬ、盡し足下亦心に慊焉たらざるものあらんか、問ぬ爾來足下疲食如何にや。又問ふ足下得意の常套手段を以て、再び江州の名物とあつていかん如何。

藤田治郎右衛門君

足下僕磯部龜吉君を目するに、源五郎鮒を以てせり、設し之をして誤評あらざらしめんの、足下亦「ヒガイ」なるの價値は、充分に之れ有らん也。

夫れ「ヒガイ」の魚たる其形鮒よりい小ある也、其味亦之に一着を輸す也、而かも尚や世人に一名物として稱賛せらるゝものい何ぞや。是れ畏れ多くも 今上陛下の夙に賞味し玉ふに由るとい雖も、抑も又幸にして淵波瀲灩たる琵湖に產せしに由ればなり。若し之をして水波滌漫たる遠洋大海に產せしめんか、盡し尋常一様鮒魚の類あらんのみ。之を要するに、鮒い琵湖に產するを以て名ありと雖も、琵湖の又實に鮒を以て其名高し。獨り「ヒガイ」に至つてい、琵湖に產するを以て名あるのみ、未だ以て琵湖の名を輝かすに足らず。倘し此「ヒガイ」にして琵湖に產せしめざらむか、遂に以て其名なからん也。抑も又一名物として世人より稱賛せらるゝの價値あからむか、盡し足下が江州に生るゝ、倘ほ如斯ものわらむか、足下にして若し假りに高郷石川乃至福岡地方に生れしめんか、只是一個の壯士、一個の撫輝漢を以て了らん耳。只夫れ政治思想

を有するものゝ乏しき此江州に生れたる、實に足下が今日の名ある所以にして、抑も亦足下の幸福あり。僕故に曰く、「ヒガイ」は琶湖に産るの故を以て名あり、琶湖爲めに其名を輝生れたるを以て、其能く今日あるを致す。「ヒガイ」あるの故を以て、江州未ざ重きを加へずと、足下名勿としては先づ斯の如けかさず、足下あるの故を以て、江州未ざ重きを加へずと、足下名勿としては先づ斯の如ん耳。然れとも足下は江州の一名物たるにも相違あし、何爲ぞ江州一人の足下を欽ぺむ、吁足下亦一偉人なる哉、宜あり嘖々世人の稱贊すること。

足下、僕筆を馳せて爰に至る、自ら以爲く、世の足下と月旦するもの、未ざ道破の適評を足下に呈せしもの、恐くい之れ無からん歟と。足下幸に僕が此評に首肯するあらバ、乞ふ一片の感謝狀を致すに吝なる莫れ。若し夫れ中邑庄五良氏に呈するに、滋賀鎭臺の稱を以てし、足下に呈するに、五ツ紋將軍の尊號を以てせざる首唱者れ、實に僕ありき、足下感謝狀を贈るの日——如しあらば、併せて之をも感謝して可ならん也。

谷口おせんさん

一筆進上たてまつり、僕事つらく今日のげいしや衆仲間のありさまを、觀察ヲツトうかゐひろ〳〵に、まことそもじ迄の如き、敏腕達識ドツコイおらぶ迄は、日本八十餘州廣しと雖も又と他にい之れおさかと、感したわしを存じたてまつり候。さて承りい得て、そもじ迄には、つとに奏任勲等と申す聞くもおそろしき、おらい評判を取り召されい由、野暮なる僕事、其何故かは、能く存じ申さぜい得共、或人れ誤にそもじ迄にい、今を距る十八年前、すなはち明治九年、西暦千八百七十四年、芳紀十一の時よりして、二十八歳と云ふ大年増の今年まで、柳のちまたに身を沈ませ、イナ浮かはせ召され、此間たとひ如何なことあるも、苟しくもをやしくも、宮奏任以上（其裏面はともかく）にあらざれバ、肌身を觸れぬてふ、それはくいと凄ごい心願を、古開の天神様に掛々させ玉ひしとのことにて、此評判だとや。すことに有之い一体全体奏任官とやすもれい、左様にたふときものに有之い哉、僕等天爵とや。す公侯伯子男爵よりも、まざくたふとき位をわが先居りいものいまおこよと見れば、奏任は愚かあこと、勅任親任も尻の河童と同様、まこと論つらうも馬鹿々々しき

限りに有之ℓ。しかしそもじ達のまあこにい、如何に此等れお人達が、たふとくありがたくうつるもれにℓや、僕等には一圓合點の行かぬことに有之ℓ。先づ早い處奏任よりやさ
ば、○○書記官様（マダ外にタント居ℓけれども一の如きものでおらうと存じ候。成る
程り〳〵しきお背、活潑なお顏質、金鎖を胸先にピカつかせて、黒塗車で役所勤の處あんも
は、却々に見ン事あるもにて、そもじ達に非ざるも、りゝる扮装の人にい、女がやれ〳〵
するにい違ひなからうと存じ候〳〵。左り乍らそもじ達のやうに、アレい奏任だから狎客
にする、其他には肌身を觸れぬと申さるゝには、何にか其ン所そこらに、曰く因縁がなく
ちやあらぬのと、岡焼の様ではあるけれど、頗るうたがはしく存じ居り候〳〵、若しお茶
挽の晩も有之ℓれい、例の祐筆にお托しあつて、右證明の程ねんじ上候〳〵。
次に又祐筆と申さば、想ひ起こすこと有之ℓ。ℓつの頃であつたか、近江新報がふまお藏
妓と題して、そもじ達が赤襟の通辨人と、勝所は坂本屋でしう〳〵のこと、ろもじ達
の腕前としてい、途轍もない不埒を取り召され云始末を、書き戯せたを、ドおらい五立腹
で、人其人は何々する所の人れ何んだとか、妾巧言令色を好まずとか、喝とか淡とか、通
辨口調や、四角張つた漢語交りで、長々しき取消文を贈られたとかあるやに存じ居り候〳〵

○登下僕事其五名文を讀み、今回の騒妓おんどおらいかのだ、妾巧言令色を好まず、
ハハア學識もあれば、藝妓として藝妓れ事とする巧言令色の行ひもあい、之れでは追ッ付
け石が浮んで、木葉が沈むの時も來るであろうと、ヒタと慥き入ッ事有之ℓ。鹿る處猿
ところ、近頃はのうに承りℓ得ば、ろもじ達にい、二十八年京都に開く内國勸業博覽會と
、桓武天皇紀念祭とℓ當て込み、サイおらの一言を名殘りに、臼大の尻に帆を懸け、逢坂
山の關路を後に近江路や、身の終りゝヲットと方角が違う、兎に角一巾絞り上げんと、酉
さす西の都にかしまだな、人其人は赤き罪を書ふる所の人（それト云の取消文口調を假る）
を擒にし、妾巧言令色を事とせぬとか、何んとかは眞赤ナ嘘、ありとあらゆる四十八手の
手練手管を尽くし、ツアンダービルトか「イエスサー」、ジー、ゴールド（ヲット之れ丈い故
人にあつた）か「オールライ」と、當るを幸ひに抱き占め、蠏がては Ocen lane（おせん
銀行）の大看板を、シカゴ府の眞ン中、五層樓のテッペンに掲げんとの、大野心あるとの
ことに聞き及び申しℓ。今れ書し安政の頃、横濱岩龜樓の女郎喜遊は、露をだにいとふ大
和の女郎花、降るアメリカに袖はぬらさじとの一首を詠じて、自害した抔とい、脅王擾夷
の當時にこそ、天晴れ女丈夫とも何んともたゝへられけめ、明治の今日而りも内地雜居も

、早晩實行せられんとする今日より見れば、まこと野暮の骨頂そもじ泡の達識能くもこのところを看破り召され、他に先んじて此計畫を企てられしは、溜水の島巡り、三井寺石山寺等の開帳ナンドは物の數かは、古今無類の寶物開帳と、出掛けてい、赤提共涎を垂らし、觀世音の五利益に、隨喜の涙を溢やすあらんかと、今より推いもじ能在り予しい、殊に又各地より夫々の計畫い、京都の事務所へ通知するおとにい得ば、そもじ泡にも、追つて此計畫を通知召さるゝことゝ存じまする〳〵に付ては、自然西村前農商務次官様のお耳にも相達しやすべく、勿論ホテルを新築する抔とい事遊ひ、經費も要らざる儀よ有之、定めて西村様にはヒタと掌を拍つて三嘆召され、コレでおそ拙者遊説の功あると予すもの、奈良の大佛、名古屋の城を共に廢物利用とは、之れらのことであると、お褒め召さるゝに相違あからうと存じ上げまする。

兎に角前陳の次第、そもじ泡の如く勘平泡と年競べを爲さるゝ年增と相成つては、日本八は最早廢物として見る時代に有之い得い、おゝ一番そもじ泡如き老妓株を利用して、赤背の鼻毛を數せまむるは、一擧両得の計畫と予すものにて、而かもそもじ泡が先見の明あるに、とくに之を看破り召された達識には、僕事ホト〳〵感寸の至り、日本八十餘州廣しと雖も、又と他にい之れなきやうと、渉したはしく存じまする。

○尚はそもじ泡には、傚より始められし後ち、他のお茶挽連をもおすゝめあつて、續々押出し相成しい、曾に他のお茶挽連の功德とあるのさなら迚、一としは國益の親玉と相成りやすべきかと存じまする〳〵、此点につきそもじ泡の思召しは如何い併せて相うかゞひ予上先づいおらく穴かまお。

豫告

默軒學人小川忠之助君著

公開書翰 第貳編

不日刊行

一本編掲載の人物は左の如し

下郷傳平君　中小路與平治君　川島宇一郎君　脇阪行三君
山崎友親君　石黒務君　淺見又藏君　清水勝定君
樋口一成君　谷澤龍藏君　中山勘三君　村田源三君
田部文藏君　高原一義君　大原重右衛門君　野並魯吉君
横田耕君　立川伊與助君　坂部小郎君　正木櫃友吉君

計

明治廿六年五月

發行所　草津　井筒商店

明治廿六年五月二十二日印刷
明治二十六年五月三十日發行　（實價金拾錢）

滋賀縣滋賀郡大津町大字瀧郎第十八番屋敷寄留
著作者　小川忠之助

滋賀縣栗太郡草津村大字草津第四百三十一番屋敷
發行兼印刷者　恒川嘉三郎

滋賀縣滋賀郡大津町大字樹屋第廿二番屋敷
印刷所　桝屋町活版所

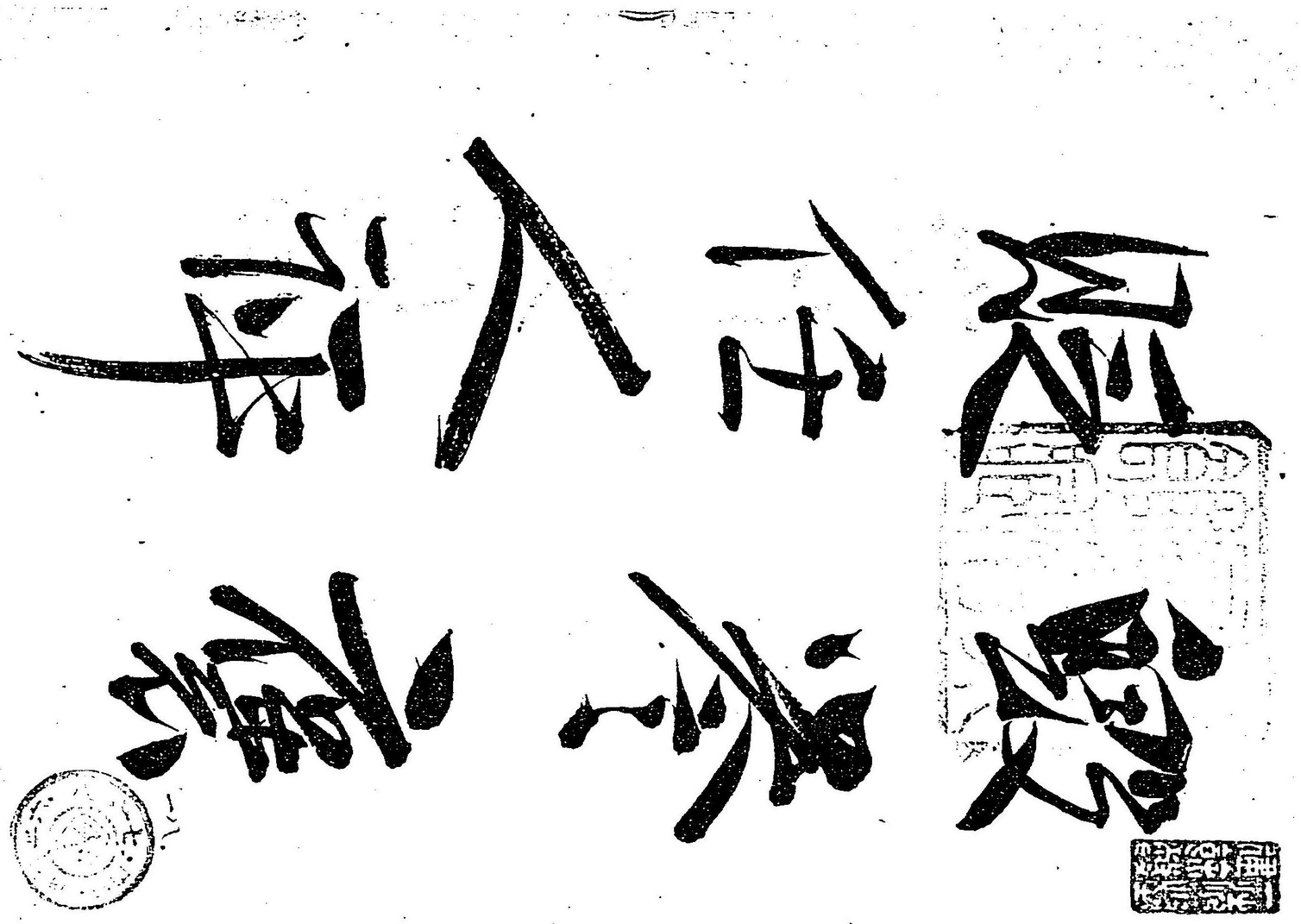
近江草津三丁目
發兌書肆　井筒商店

公開書翰

第貳編

櫻洲山人中井弘君題辭
默軒學人小川忠之助著

發行所
草津
井筒商店



梅阿山人題

◎公開書翰第貳編序

默軒子ゞ公開書翰に接せらるゝ、諸君も、何れも吾江州に在る知名れ士あゑ。いな、中には廣く全國に名を知らるゝもあゑ、少なくとも一郡一鄉には雄視し、幾多乃聲譽と注視を六尺乃軀に萃めらるゝ乃人々なり。男兒地に落ち、碌々名なきを耻づ。諸君は既に多少傑出の名を博も、今まゝ文士默軒をして已が性情行徑よゑ、聲音笑貌乃細ゝに至るまで盡く之を描寫し、之を評論せしめて一層其名を世間に馳せんとす。諸君亦豪ありといぬべし。されゞ默軒の描寫も、隨分眞率なゑ。默軒の評論ハ、隨分無遠慮なり。人を論評するの道固より爾あるべく、美を美とし、醜を醜とし、假粧の外皮を活剝して、直に其眞相を露呈し、一毫假借する所あきは當然の事なりと雖も。中ゟは論評の冷氣に冒されて、はつくしやみをなし玉ふもあるべく、また本領ある美德を發

梅陰小山人題

◎公開書翰第貳編序

默軒子ゞ公開書翰に接せらるゝ、諸君も、何れも吾江州に在る知名れ士ならぬ。いな、中には廣く全國に名を知らるゝものをも、少なくとも一郡一鄉には雄視し、幾多乃聲譽と注視を六尺乃軀に萃めらるゝ乃人々なり。男兒地に落ち、碌々名なれを恥づ。諸君は既に多少傑出の名を博ち、今まさ文士默軒をして巳が性情行徑よを、聲音笑貌乃細乃至るまで盡く之を描寫し、之を評論せしめて一層其名を世間に馳せんとす。諸君亦豪なりといぬべし。されど默軒の描寫も、隨分眞率なを。默軒の評論ゝ、隨分無遠慮なり。人を論評するの道固より爾あるべく、美を美とし、醜を醜とし、假粧の外皮を活剝して、直に其眞相を露呈して、一毫假借する所なきは當然の事なりと雖も。中ゴは論評の冷氣に冒されて、はつくしやみをなし玉ふもあるべく、また本領ある美德を發

揮されて、傲然髯を掀せらるゝものあるべし。嬉、笑、怒、罵、十六人は十六人だけ、種々樣々れ思召なるべけれど。望む所は、此書を以て反省の資となし、他山の石となし、切之、磋之、琢之、磨之、恰も寶石師の玉を攻むる如く隨分留意して工夫をなし玉へ、諸君の德は益高く、諸君の名は益廣く、一鄉の者は一郡、一郡れ者は一州、一州の者は日本全國にも、まゝ海外にも其盛譽を馳するに至るべし。是れ默軒が公開書翰を草するの眞意なるべし、と余は信ず。然らは此書么麼の小冊子たりと雖も、其功の被むる所豈渺少ならんや、而して默軒の勞また謝すべきなり。第二編刻成り、序を徵せらるゝに及び、之を書して以て贈る。

明治癸巳八月二日朝風涼しき香夢樓の
南軒に於て

天外居士序

◎公開書翰第貳編目次

中井	弘君	一	丁
下鄉傳平	君	六	丁
中小路與平治	君	十	丁
川島宇一郎	君	十三	丁
脇坂行三	君	十五	丁
山崎友親	君	十八	丁
谷澤龍藏	君	二十	丁
中山勘三	君	二十三	丁
手塚太郎	君	二十六	丁
野並魯吉	君	二十八	丁
猪飼麻次郎	君	三十三	丁
村田源三	君	三十六	丁

清水勝定君　三十九丁
清水清吉君　四十丁
西村清知君　四十二丁
久保季樹君　四十五丁

◎公開書翰第貳編

中井弘君

默軒學人　小川忠之助著

天下才子多し、而して足下の如き才子い抑なし、天下横着物少なからず、而して足下の如き横着物は實に稀れなり。宇内詩人多のらすとせず、而かも足下に勝るの奇人い罕れなり。洵に足下い才子にして横着物なり、詩人にして奇人なり、天下廣しと雖も、宇内大なりと雖も、這般の人物はまお何の地にの之を求免む。

深淵該博なるに非ざる也、而かも能く人をしてパノラマに對するの感あらしむ、才子に非ずして何ぞ。足下の勢威未だ以て廟堂の先輩を凌ぐに足らざる也、而かも巧に渠等を其掌上に籠弄す、天下の横者物に非さるよりは、誰か能く斯の如くあるを得む。足下の詩未だ黄絹幼婦の境に入らざる、纖巧の以て稱すべきなき也、而も氣を以て勝る、煙

鎖亞剌比亞海、雲迷亞弗利加洲、客身遙在青天外、九萬鵬程一葉舟。吁何ぞ辭句流麗壯大にして、腕大斗の如きや、亦是れ一世の大詩人に非ずして何ぞ。足下の風采固と奇人に非らざる也、其言行亦力めて奇々衒ひんとするに非さる也、而かも其發して言とあり、其顯れて行とあるものを見る、一として奇に非ざるいなし、思ふに奇を衒はんとするに非ずして自ら奇あるもの、是れ足下が奇人の奇人たる所以なるか非邪。若し夫れ足下の奇言奇行にして一々枚擧せんか、僕と更ふるも尚は且つ足らざらむとす、吁足下這般不世出の器と抱き、久しく山紫水明の裏に隱れて、其聞へさらむあとに汲々たるは何ぞ、僕窃かに足下の爲め閔々焉たるものなき能はず。

勿論足下れ功成り名遂げて、高蹈勇退せるには相違あからん、然れとも僕を以て之を見るに、足下春秋尚は未だ高しとせず、之をして泰西人あらしめバ、之よりして益〻名を馳すべきの時代なり、山色水聲處の藥隱居として、悠々自適風月に傲吟するの時に非さる也、然るに足下の其之を爲さゝるは何ぞ、借問す滄浪の水濁れりとするに由る歟、將た又盛之上九の所謂王侯に事へず其事を高尚にせんとするに由る歟、抑も亦東山に妓を携へ、謝安が臨安山中の興を遣るを以て、無上の娯樂と爲すに由る歟、吁何ぞ然らむ。

然らば何爲ぞ足下遂に山を出づるに意ある乎哉、他あし足下一の世に平ならざるものあるに之れ由る。其平あらざるものとは何ぞ、次官とある能はざるに由る乎、未可なり。大臣と爲る能こざるに由る乎、尚は未可也。只夫れ足下の平あらざるものゝ、滄浪の水其纓を洗ふには餘りに清みたるに由るなり、世〻益々秩序的の時代となりたるに由るなり、立憲治世の時代に變したるに由る也。

倩ら思ふに、足下れ不秩序的時代の才物もり、專制政体時代の人傑也、足下の横着的政略と奇行とれ是等の時代にこそ用ゆらるゝめ、今日の時代とあつてれ施すに地あき也、是れ足下が今世に平あらざるもの、而して山を出づるを敢てせざる所以あらとず。足下請ふ僕を以て、漫りに酷評するものと見做す莫れ、僕は寔に若かく思ふ也。

然れとも足下、僕大に足下に望む所あり、足下が多年我滋賀縣に令尹たるや、其廳に出勤するもの月に両三日、滿廳れ政務れ擧げて足下が親任せし所の、今の警視總監當時の書記官關田安賢兵ま一任し、足下偶旨判を爲すありし而已、多くは風流汗漫の遊に日を送りしあり。而かも一朝縣間題として一大事件の起るあらば、滿身の熱血を濺き立ろに之を辨じ以て能く縣民の輿望ま叶はしめたりき。是を以て我縣民の足下の恩德を蒙むる久しく、足

下を敬慕するや今猶は父母の如し。足下勿論再び出でゝ、地方官と爲るの意あるは明かなりと雖も、今日我縣下の治務擧からず、官民の間隠然として脊軋轢せるの狀あるを知らば、思ふに足下袖手傍觀すべからざるものあらん。足下にして倘し江州士民れ日夕足下を敬慕する丈け、江州を思ふあらしめば、何ぞ再び出でゝ江州を治せざる。今や世は秩序的れ時代に向ひ、次官とあり大臣となるには、固より困難のことあらんも、地方に長官たることは、尚ほ昔日と異なるあし、矧んや足下と我江州との關係水と魚との若きをや、果して足下にして再び我江州に知たらは、廳に出でざるも可なり、風流汗漫の游を爲す尚ほ今の如くして可ならん也。只足下が江州に知たるの聲を聞かば、縣民は山色水聲處に棲遲する如くして可ならん也。只足下が江州に知たるの聲を聞かば、縣民は喜んで井を穿つて飲み、田を耕して歌はん而已。思ふに大丈夫天位玉侯と爲らざるも、苟も其盛德斯の如くんば、復た何をか旃に加へん、矧んや大臣とや、矧んや又其次官なるものをや。足下我江州の好風光を弄し、足下の爲めにい赤子曾らざるの縣民を愛撫し、此地を以て終焉の地と定めば、其快果して奈何ぞや。聞く露國と在つては、地方官は其官を移らざるを以て例とす、故に短かきも二十年長きは三四十年も勤續せるものありと。要するに是等の地方官をして、能く土地人情風俗を熟知し、能く地方の治務を擧げ、以て官民の

間を圓滑あらしむるに外ならず。今足下の多年我江州に令尹として、能く縣下の情況に通曉せり、縣民の足下を德とし、足下を敬慕すると亦一朝一夕の故に非ず、此時に際し足下尚は世に平ならざるものあり、徒に山に隱れて醉鄉の徒を擧ばんよりい、官卑しと雖も、再び出でゝ我江州に令尹とあり、安樂に世を送るの勝れるに如かざる。僕は足下の爲め又縣民の爲め、足下が再び出でゝ、江州に令尹たらむとを切に望むんで止まず、知らず足下僕が此希望を容るゝの意ありや否や。

下鄉傳平君

足下世人咸な花に眠り、月に醉ふの時に際し、獨り商機を幾微の間に察し、拮据營々寤寐怠らず、能く鉅萬の富を致したるものハ、寔に足下なり。

世人咸な食前方丈、玉杯象箸、酒池肉林、阿房を築き、强盜と設け、楊妃を左にし、易牙を右にし、讌安淫逸を事とするの日に當り、獨り蝸廬に住し、黍菽を茹ひ、錙を算し、銖を數へ、毫と積み、厘を累ね、左にするものハ簿冊、右にするものは牙籌、能く分を守り、儉を勤むるものハ、寔に足下也。

語に曰く、創業は易く守成と難しと、創業固と易きに非ざ、守成殊に難きを謂ふ也。今や足下此易からざるものを易く成し遂げ、且つ殊に難きものを能く難しとせずして晏如たり、足下豈に當世商業界の一人傑ならむや。

僕甞てジーゴールドの傳を讀み、器が渠れの人と爲り、又事業の一端を窺知す、渠は實に第十九世紀に於ける商業界の魔王ありき。乾坤濶く商人衆しと雖も、渠れが如き敏才活智の マーチャントは、古來未だ曾て之れ有らざる也。而して今我邦の所謂豪商巨賈の爲す所を見

ざ、其人と爲り及び其起業の形迹に就て、能く之に似たるものある歟、恐くは之れなかるべし、倘一強て之を覓めむ歟、蓋し足下ハ其人あらむ也。

足下が曾て往年陋巷に在り、微々に餅を鬻ぎ、餅傭の稱号を得さる時ハ、猶ほ渠れが貧窶なる田舍の牧業家たりし時の如き。其后足下が古器物の贋貨を爲し、又肥料物の商を爲し、次第に財嚢を膨らしめたる働き振りは、幾んど敵の及を假て他を斬るれ概あり、猶ほ渠れが漸く志を得て、彼の有名ある鐵道王ヴンダービルトと汽車荷物の競爭を爲し、遂にヴ氏を困頓せしめて、奇利を博せし時の如し。其他足下が米商となつて、輸贏を一呼吸の間に爭ひ、百戰百勝敵をして常に餅傭ハ鬼神かと、恐れしめたるの敏腕を揮ひたるが如き、又好機に投ぜて大阪製紙所を買入れ、及ひ近江製糸場を創立せしが如きハ、渠れが投機商界に一顰一笑すら、且つ重んぜられし形蹟と、何ぞ相似たるとの太甚しきや。僕竊に曰く、我邦に於てジーゴールドの雛形を覓むれバ、只足下ならむ耳と。

呼棄れジーゴールド固より足下の儕に倣ひしものに非ず、足下亦渠れに學ぶ所あるに非ず、然して其爲す所、企つる所、東西自ら其揆を一にするものあるは何ぞ、豈に惟ならずとせむ哉。然れとも惜しむ莫れ、蛇ハ一寸にして能く人を呑むの氣あり、英雄は自ら英雄の

心あり、古今東西の偉人傑士と稱せらるゝもの、往々其行爲を一にするものあることは史上に歷々たり、惡んぞ機を覩るの敏捷を尙ぶ商人に於て、此事あるを惟しまむ、足下亦洵に一人傑なりと謂ふべし。

只僕足下の爲めに一の惜しんで止まざるものあり、廼ち足下が守成の節操に富み、固を偸を勤むるの美事たるに相遑あし、然れとも僕を以て足下が所謂偸を勤むる所以のものを見る、設し畏憚なく評せしめば、節偸に非すして寧ろ吝嗇に陷るにの非ざるなきか非邪。試ミに思へ足下今位從七位に叙せられ、身貴族院議員たるに非ずや、既往の餅僊の稱號にて、人も許せば己れ亦自ら之ま甘じ居て可なりし也。然れとも今後は世人とり仰慕せらるゝ丈け、足下亦自ら尊ばざる可からざる可からず、此威儀を備へんには、須ゟを學識才辯を備ふるを要す。勿論足下前半生の歷史は、餅僊の歷史なり、商人の歷史なり、足下豈に學識才辯を具備すべき理あらんや、然り只夫れ然るが故に、足下の後半生には、渺なくとも自ら學ばざる代りに、其自ら學び得たる人丈けの、働きを爲すの技能を揮ふことを企圖せざる可らず。否らずんば、足下ゟ縱令位從七位に在り、身貴族院議員たるも、遂に一個の餅僊たる豪商にて畢らん也。」

足下にして設し余ゟ前半生に於て、勝利と成功の歷史を以て、商業界に名を博したれば、吾館事茲に畢る、復た多きを望まじと言ふあらしめバ、僕敢て何をゟ言はむ。然れども足下ゟして今日の位地を、尙ほ一層高めんと欲するあらしめん歟、宜しく之に應する丈けの準備を爲す可きあり。其準備とは何ぞや、他なし多くの門下生を養成して、幅輻れ中に參せしむること是れあり。而して之を爲すにハ、瞰て足下が前半生に於て、貯ひ得たる財の幾分を散せざる可らず。之を從來の實歷に倣するに、足下果して此行爲ほりしか、管に足下自ら進んで之と求めざるのみならず、偶足下の爲め自ら干めんとするものあるも、足下之と諧せざるあり。斯の如きハ、即ち足下が偸を守ると稱して、其實吝嗇に陷るあきにあらざるを知らん哉、宜あり商位赫々の光あきこと。

之を要するに足下前半生れ事業ハ富を致すに在り、故に其資本ハ錢なりしなり、然れども後半生の事業ハ名を爲すに在り、須らく錢を散するとを以て其資本とせざる可らず。更に之を言へば、名を爲すの資本として門下生を養成し、之を養成もる爲めに錢を散せざる可らずと。蓋し足下が機を視るの敏捷ある、能く此事を察せん也、不幸僕未だ其事實を見ず、是れ僕が足下の爲め、惜しんで止まざるものありと謂ふ所以なり、足下以て如何と爲す。

中小路與平治君

足下僕下鄉傳平君を目するに吝嗇家を以てせり、設し節儉家と吝嗇家とを分つて、精細に分類せば、縣下の人士中、吝嗇家の部類に編入すべきもの、蓋し多々ならむ。則ち下鄉君を以て東の大關とせば、川島宇一郎君の如きは、西の大關なる價値い充分に之れ有り、而して、足下の如きも、恐くは遂に此部類に編入せらるゝを免れざらむ歟。

然れども人には各特性あり、未た一れ微瑕を以て全部の美德を傷く可らず、殊に足下の如きい、夙に溫厚の君子人を以て、眞正に人の心服する德望家を擧げ、恐くは足下の右に出づるものなからむ、此故に足下多年の間擧げられて縣會議員とあるや、常に議長たり又常置委員たりき。僕未だ足下が學識如何に該博あるか、才智如何に衆を拔んずるかは之を知ざるも、兎に角議長として議場を整理するの巧なる、猶は手の指を使ふが如く、如何に紛々擾々の論議起るも、之を裁斷して議場を靜肅ならしめざりき、又常置委員として縣官に對す、彼等をして幾んど一敵國に對するかの如き感を抱かしめたるが如きは、德望あり且つ大手腕あるものに非

ずんば、之を克くせること能はざらん也、其餘は復た問ふを要せず。

斯くの如くにして足下い世人に畏敬せられ、欣仰せられ、遂に擧げられて今や衆議院議員の職に在り、足下の如何に既往に幸福にして、將來に多望なるか知る可きあり。只夫れ僕未た一の足下に慊焉たらざるものあり、必らずしも足下が第三第四の兩議會に默々たりしを咎むるに非ず、又必らずしも同盟俱樂部に赫々の聲名を博せざるを責むるに非ず。足下が多年の素志さる地價修正のことも、時機の未た可あらざるもの有れば、默するも可なり、運動せざるも亦不可なし。徒らに虛名を博せん爲免、要あきに僥吝を蔽し、外觀を衒んとする彼或一派の人士の如きは、適以て士たるものゝ名を辱のしむるに足るもの、溫厚篤實れ君子人は之を爲すを敢てせず。然れとも三年鳴かず翅ばざらんの、人或は其心意の那邊にあるかを疑ふに至らむ、是れ亦代議士たるものゝ能く察せざる可らざる一要訣あるん也。足下にして僕が確信する如く、眞正に地價修正のことを以て、獻身的の事業とあさば、倘し又自改兩黨と吏黨との間に立つて、合縱連衡調和牽制機に臨み變に應じ、常に國利民福の爲めに運動する誠意あらしめば、必らずや三百頭顱の中に立つて、一大手腕を揮ひさる可らず、今や足下の前途は多望あり、希くは第五議會には、世人をして刮目凝視せ

しむる底の運動を試みんおとを、至嘱々々。

川島宇一郎君

僕嘗て武郷候が群下に發せし所の教書を讀む、中に言へるあり、夫參署者。集衆思廣忠益也。若遠小嫌難相避視噴闘損矣。違複而得中。猶梁徹蹄而獲珠玉。然人必苦不能盡と、吁何ぞ其言辭の森嚴にして、其心意の沈痛あるや。苟くも熱誠身を以て國に許す武郷候其人の如きに非ざんば、誰れか能く此言を爲さん、千載の下今尚ほ人をして其高風を欣慕せしむるもの、良に以なしとせざる也。

夫れ今の衆議院い猶ほ參署のおとき邪、定に國民の粹を抜き、衆思を集め、忠益を廣くするの所なり、故に之れが代議士たるもの、常に蹇々匪躬の節を致すを以て心と爲し、違複し力めて中庸に出づるの熱夏なかるべからず。苟くも小嫌を避け忌みて、遂巡躊躇相違複し難しとせば、是れ政事を噴闘して、國家を損し、黎民を賊するもの、豈に代議士たるもの、本分あらむ哉。

今足下擧ぐられて代議士たるもの爰に數年、果して此心を以て心と爲し、其職を噴ふするが如き行爲あるや否や。僕只足下が枕流大東君の幕下に隷し、其顧使に應えて東し、將た

西するを見る焉耳、未ざ己れの意思を以て、侃諤諤能く忠益を廣くする所あるを見す。勿論同盟倶樂部は自政府當と吏黨との間に卓然自立し、國利民福の爲めに力めて中を得るを期すと雖せば、足下必らずしも小嫌を遁々て、相逢復し難しと爲すが如き心意い之れ勿かるへし。然れども僕等世人一般の見る所、武鄕侯に非さるも、人心尽くす能いさるを苦むの嘆、足下に於て殊に其切なるを覺へずんはあらす。僕已に中小路君に與ふる書中に言へり、三年鳴らす翅ばさらんか、人或は其心意の那邊にあるかを疑ふに至らむと、此言取て以て亦足下の頭上に獻すべし。設し足下にして擾拳ある者い亡し、默々なる者い存す、是故に玄を知り默を知り、道の極を守ると言ふあらしめば、僕復た何にをか言いむ。足下にして只默の以て守るべく、默の以て守るべからざる、時と勢とを達觀するの明あらば幸あらん耳。

脇坂行三君

足下僕聞く、上醫ハ天下を治し、下醫ハ病を療せと。僕未だ足下が國手としての伎倆は、能く之を知らず、然れども足下が政事家としての手腕い、夙に之を窺へり。廼ち足下が自由黨れ一人として、又前代識士として政治社會に盡せる功勞い、幾んど刀主社會に盡せる効勞は倍蓰するものあるを知る、謂つべし足下い下醫に非すして其上醫たるを。而して僕は即に望む、足下百尺竿頭今一歩を進めて、寧ろ純然さる上醫とあらむことを、盖し此希望や僕一人のみならさらむ歟。

夫れ家貧にして良妻を思ひ、國亂れて忠臣を思ふい人情の常あり、大旱に雲霓を望むもの、豈に獨り農夫のみありと言はむ哉。今や倚ち天下の大勢を見る、猶ほ家貧にして良妻と思ふの着いあき乎、大旱數旬に溯り天一滴の膏雨を降さす、百姓咸な倾を延べて油然たる雲、沛然さる雨を俟つの概はあき乎。僕敢て叨りに國亂れたりとは言いす、又漫に奇矯の言辭を衒つて、顓骨錢の如き忠臣起たんことを望むの時なりとは言はす、只夫れ滔々さる社會の風潮と、暗黑の天地に向つて注流もるの傾きはなき乎、朝に在るの臣にして秦廷玉

倫を學ふものはあき乎、野に在るの民にして至尊の聖影に對し、不敬を加へんとせしものはあた乎、朝祿を食ひものにして、奇利を商界に博せんとするの輩はあき乎、代議士にして卑しむへき收賄を事とする狡奴いあき乎、社會の耳目を以て自ら任すると稱せるものにして、曲學阿世の徒はあき乎、育英の任に膺るものにして、人倫を紊亂する如き行爲あるものはあき乎、風敎道德の矯正を以て已が任とする圓頂緇衣の徒にして、賤女子と戯れ善男善女の淨財を犧牲に供するものはなき乎、家族制を廢して個人制となさんとする西洋心酔者はなき乎、非濛の前に膝を屈して同胞に倣るの耶蘇信者とあき乎、羊頭を掲げて狗肉を賣るの奸商いあき乎、高臺陂池の裏に住し、白晝傲然として人に對し、暗夜窃かに顯門に出入するの所謂紳商なるものいあき乎、表面官用と稱して裏面に觀光の游を爲す、到る處紳商狡奴の謾應を受くるの汚吏はなき乎、白晝劍戟を闔はし、無辜を斬るの圓帽角袋はあき乎、百鬼夜行の怪景はあき乎。吁僕再び言ふ、敢て叨りに國亂れたりとは言はす、奈何せん社會は風潮滔々として、這般暗黑の天地に向つて注流するとせは、江州司馬に非さるも誰れか青衫を濕さゞらん、長安の賈生に非さるも誰れか亦た血淚を揮はざらむ。蓋し今日多衆の生民が、頸を延べ足を翹てゝ、這般風潮の潮頭に立ち、一大回瀾の手腕を揮ふの人傑出でんことを望むもは、良に以あらざらんや。

孺つて思ふに、足下い縣下に在つて第一流の人士あり、之を全國に出だすも第二流以下に落ちす、足下の如きい政事家中眞個玉の如きの君子人あり、其私に在て人に接するや温容迫らす、其天下の公を議するや、論議縱橫復た假借せす、僕が足下に向つて寧ろ上醫と以て任せよと言ふ所以のもの、洵に爰に在らん也。足下何ぞ自ら揩つて爰に在り、世人が夙に足下に望を囑するもの亦蓋し頗に立ち、以て世望に辜負せさらんことを期せさるか。

頃者仄に聞く、江龍代議士は大に感ずる所あり、辭職に意ありと。渠れ吏黨の乾兒輩宜しく速かに去るべし、渠れにして如し去らば、第四撰區中足下を措て他に眞正の人士なし、足下區民歡呼の裏に必らず起てよ、僕い一日も早く足下の起つを望む者なり。

山崎友親君

前代議士自由黨員山崎友親君足下、足下の擧けられて代議士となるや、杳として聞ゆるなかりき、其總選擧に敗を取るや、亦人の足下を吊する者なかりき、足下自由黨の一人として、殊に脇坂君と共に縣下自由黨員の先進者として、多少の聲望あるにも拘らず、何ぞ世人より重さを置かれさるの太甚しき哉。人は謂ふ足下は老朽最早代議士たるの任に非ずと、夫れ然り豈に夫れ然からん哉。

回顧せば足下往年膳所監獄署長として、又栗野郡長として、幾分か手腕を揮ひしことあるに非ず、老ひたりと雖も今日尚は用ゆるに足るものあらんことを、足下が現に脇坂君と共に滋賀縣自由黨俱樂部の幹事に推され、又淡海同志會の創立者に名て且つ總理（名は幹事なれども）たるを以ても知るべし。然らば足下を目して、老朽事に堪へずと評するものあり、未だ能く足下を知らさるものなり、蓋し足下が出處進退に於て世人より重さを置かれさるは、主として足下の學識才幹天下の政を譚るに足らさるものあれバあり、故に遊慮會釋あく足下を評せば、足下れ老朽の故を以て代議士たるの任に適せさるに非ず、足下の學識才幹未だ初めよりして代議士たるの任に適せさる也。

且つ夫れ足下の一たび擧けられて代議士となる、自由黨員中の有力者として區民に推されしに非ず、一言以て之を蔽へん、郡長の古手としてマア山崎を擧ぐべし位にて、區民が推擧せし迄なり。又臨時總選擧の際非常の干渉を蒙りしも、當路者の意は、足下が只籍を自由黨に掲くるの故あるのみ、足下を恐るべきの一人物として干渉せしに非ず。知るべし足下が代議士として價値あらざることは、宮民共に夙に之を洞見するを、宜なり其擧げらるゝ杳として聞ゆるなく、其擧けられざるも人の吊するあきおと、足下倘し自ら見るの明あらバ、宜を人とも怨むなくして可ならん也。

谷澤龍藏君

足下天下に不遇者多しと雖も、足下が近年に於ける如き不遇のとは、蓋し其儕ひ罕れあらん。抑足下廿三年初期議會の時に當り、議員候補者として福井縣第四區より切て出でゝ敗を取り、其後臨時總選擧に再び名乘り出で、本縣第一區に於ては川島君に奪はれ、福井縣第四區に於ては藤田君の爲めに敗を取れり、殊に藤田君との競爭の如きは最も激烈にして、其極裁判沙汰とまで、遂には大審院の裁定を仰くの大事件とはなれり、而して惜しむべし、足下堅子として竟に名を成さしめぬ、降て本年辨護士會組織の時、亦慮りなくも足下が豫て自らも期し、又人も期したる會長の任を他に奪はれぬ。吁人事由來多くは心と違ふ、豈に翅鴨川の水雙六の采山法師のそ意の如くならすとせん哉、然れとも足下近年の如く頻々失敗に失敗を重ね、不遇の嘆を發するものは、世多く其比を見ず、僕豈足下の爲めに感々焉たるものあからさらむ哉。

然りと雖も足下幸に自ら寛ふせよ、古來盛名の士多くは屯邅坎軻災厄に遭逢せさるはあし、孔夫子の聖を以て尙は且つ陳蔡に厄あり、エスキリストの偉人にして而かもユダヤ人の

迫害は之を避くるに由なかりき、其他釋迦ソ奈何、ソクラテスは奈何、マホメットは奈何、孟軻は奈何。語に曰はすや八多くして天に勝ち、天定て人を勝つと、世に盛衰あり、時に可不可あり、苟くも時にし可ならさらむか、蛟龍も魚鼈一笑の値に過きす、淮陰候現に一たひ市井の少年より、跨間を潜ることを餘儀なくされたり。必竟天命時運は人の得て左右すへからさるもの、凋落も時あり、開展も時あり、萬山木落ちて麋鹿悲むの秋も一過せば、噴野花開いて黄鳥歌ふの春は來るあり、凡そ物事窮極の點に達せば、更に其反動の結果ゐ、正比例的に發展し來る、彼の山極つて水生ずと云ふもけ豈に故なからさらむ哉。且つ夫れ老蘇曰はすや、天を樂て天に娶る、者其責我に在り、天に逆ぬ者其責人に在り、我に在るものゝ吾れ將に吾力の能く爲す所の者を尽くして、以て夫の天の我に與ふる所以の意を塞ぎ、而して夫の天下後世の譏を免るゝことを求めんとす、人に在る者は吾れ何ぞ知らん焉、吾れ夫の一身の責を免るゝを求むるの暇あらさる、而して人の爲めに憂るに暇あらん乎哉と。實に然う、天の我に與ふるもの決して偶然に非す、吾れ只天の我に與へし能を力めて、天に應ふるの道を尽くせば足る、我れ豈くるを恐ろさるを、用ゐらると用ひさるとゐ人に在り、天に逆ふもの豈責めむ哉、足下乞ふ此心を以て勵一勵

せよ、大丈夫區々一時の厄を以て、必境を攪動すべからざらん也。

僕今天の足下に與ふるものを見る、其法理を究むる精に、理非と視る明に、學識才辨共に具備せることは、必らずしも茲に稱賛せず、殊る足下が洪量大度能く事物の大局に着眼して、小局に齷齪たらさるの氣宇に至つては、縣會に於ける足下の議論に於て僕が夙に熟知する所、一個政事家たるの資格い充分に乏れ有り、若し他日衆議院議員改撰の期に迫べば、其第一撰區たると第二撰區たるとを問はず、將た第三第四撰區たるとを問はず、我滋賀縣の代議士として必らず足下を擧けさる可らす、足下亦天の足下に與ふるものゝ偶然にあらさるを知らば、乞ふ前轍に屈せず、奮つて自ら推擧せよ、是れ足下が力の能く爲す所の者を盡くして、以て天の足下に與ふる所以の意を塞ぐものに外あらざれば也。

中山勘三君

大津地方組合辯護士會々長たる足下、足下亦夙に法學を攻究し其蘊奥を叩き、學理を晴んする精に、理非を視る明なることと、世間自ら公論の在るあり、今必らずしも茲に稱賛するの要あし。殊に足下天稟の才辯い、我大津組合代言人社會中夙に嶄然頭角を現はし、谷澤君と相竝んで多年重きを置かるゝに至れり、宜矣今年辯護士會の組織せらるゝに當り、飛げられて其會長の任に就きしこと。

然れとも僕情ら恩惟するに、足下が擧げられて辯護士會長となるも、足下の爲め未だ以て大に榮とするに足らず、又一任擧げられさるまとするも、毫も足下の聲望を毀損するに足らすと。何とあれ〻足下の聲望は、谷澤君と共に夙に隆々として其重きを置くもの、獨り辯護士社會のみあらず、世人一般に會長たるべきの價値あることい、充分に之を認むれば也の故に今假りに地を更へて、足下をして谷澤君たらしめ、谷澤君をして足下たらしむるも亳も、足下の聲望に軒輊する所なからんとす、之を要するに、足下と谷澤君とは我大津地方組合辯護士中の兩雄あり、勿論天の與ふる所以のものは偶然に非す、足下の才能と谷

澤君の才能とい、甚特所に於て各殊別あるも雖も、兩雄としての聲望手腕に至つては、僕
孰れを兄とし何れを弟とするに苦む、谷澤君必すしも足下に優れりと言はむ哉、足下亦必
らすしも谷澤君に劣れりと言ひむ哉、共に是れ當世の才物、偶々運を得ると得ざるとは時
の勢耳。見よ彼の南洲が叱咤天下に號令せし時い、甲東が心に平ならさりし時あり、甲東
が威儀堂々廟堂に樞を揮ひし時は、亦實に南洲が失意の時なりし也。然れとも世人は這般
時運の變遷を以て、必らすしも此兩雄の伎倆に容喙せざるあり、是れ地を更ゆれば、共に
皆一人傑として活腕を揮ふことを知ればなり。但睚に之れ有り兩雄並び立たずと、倘し此
言をして社會上に於ける原則あらしめば、足下が這回擧げられしも時れ勢ならむ耳、谷澤
君が失意の人となりしも亦時の勢あらむ耳、吁時の勢ひ此時の勢い、足下を驅迫て遂に得
意の人とあらしめぬ、足下未だ大に榮とするには足らさるならむ歟、是れ僕か此說ある所
以あり。

然れども僕い足下が這回會長に擧げられしを以て、毫も名譽に非すとは言いさるべし、否
な實に然か言いさる而已ならず、寧ろ大に其榮を榮とすべし。何をか榮と云ふ、他なし、
足下が辨護士會組織の發端に於て、此榮職に擧げられたること是れ也、語を換へて言へば

、歷史的の榮譽あり、則ち明治二十六年大津地方組合辨護士會の組織成る、中山勘三擧げ
られて會長となると、簿冊に刻せらるゝの名譽は、百世不朽に傳はらむ、豈亦丈夫の一
大名譽あらすとせむ哉。

手塚太郎君

大津地方裁判所檢事正手塚太郎君足下、僕嘗に以爲く、學者は多くは世事に疎く、交際家は能く職務に勤勉するもの罕れありと、只僕足下を見るに迨び、大に此斷按の破れたるを感ず。

失れ足下が法律學士として法律學士中の學者、殊に當世の才物なることは、世人咸な之を知る、今茲に贅せず。只足下が中々如才なき交際家あるおとは、世人未ざ多く之を知らず、僕嘗て足下が大津組合辨護士の招ぎに應じて、某樓に會飲せしことを記憶す、當時僕亦其席に列して親しく足下と面晤せり。僕足下の名を聞くこと久しくして、而も面晤せしは實に此時を以て始めとす、此故に僕窃かに足下の風采且つ交際上の伎倆を觀察しぬ、學者としての風采り少しも欠くる所あるも、足下が如才ある交際上の伎倆に僕大に推服したり。足下十數名の辨護士を已れの周圍に置き、甲に談じ乙に說き、破顔一笑快談滔々幾んど人をして倦むを知らざらしむ、曰く諸君にして裁判所内に於ける事項中說き言ふべきあらば、乞ふ遠慮なく注意を與へられよ、曰く諸君設し余が處置に就て不可なるものあれば、直

言面折せられよ、曰く何と、玆酒々落々官民の間に畛域を設けず、胸襟を披ひて衆言を容るゝが如きは、官人社會罕に見る所、僕足下が學者として頗る世故に嫻ひ、交際上の伎倆に富むことを感嘆して措かざりき。然れとも僕未ざ足下が職務に勤勉することを知らざりし也、其後旬日以前關西警視總監近畿地方警察視察として巡回せしおとあり、足下就て大津警察署に總監を訪ひぬ、當時總監ハ、足下が監獄に於ける刑事被告人の情況、及び司獄官の情況視察として、赴任以來歷監獄署に抵り、普通裁判官の等閑に附し居る事項まで、仔細に觀察注意し、其職務に勉勵するのことを頻りに稱揚し、歸京の上は司法内務兩大臣に稟申すべおと言ひたるおとを聞き、始めて足下が尊嚴法官に拔んでて、職務に精勵するの人あるおとを知れりの吁足下は學者として而かも交際家あり、交際家として又勉勵家あり、洵に當世斯の如き才物を求めんをするも、他に其類稀れあり、僕實に我地方裁判所に足下を得たるを賀す。希くハ足下、足下の氣風を以て普く同僚に吹き込み、法官をして總て足下の如き人物は化せしめんことを、若し足下にして玆に力むるあらば、啻に一地方の幸福のみならず、汎く天下司法部内の幸福ならん也、知らず足下僕が言を容るゝや否や。

野並魯吉君

大津病院長醫學士野並魯吉君足下、人生醫師と爲るは寔に難し、幾千萬人もの其生命を依托せらるゝの重責を負ひ乍ら、種々冷語を以て迎へらるゝもの、恐くは醫師の如く太甚しきもののあからじ。蘇長公の曰へり、昔を學ぶ者の紙費へ、醫を學ぶ者は人費ゆと、アレキサンダー大王は曰へり、予は數多の醫師の助力の多きに過ぎたるが爲めに死するなりと。ペトラークの曰へり、人を殺して罰を蒙むらざるは獨り醫師のみと。而して獨逸の俚諺にも之れ有り、新しき醫者は新しき掘墓者ありと。又醫師とい汝が明日死するを防うんが爲めに、今日汝を殺す人を云ふと。佛國の俚諺にも曰へり、醫者の屢々病氣よりも恐れらるると。又汝若し醫者を友人に持たバ、之を敵に送れと。葡國の俚諺にも曰へり、醫者の失錯は土を以て掩はるゝと。我日本の俚諺にも亦之れ有り、藥人を殺さす醫者人を殺すと。呼何ぞ東西其撰を一にして、醫師を責むるおとの酷あるや。然れども足下僕倩ら思ふに、是れ決して酷評に非す、醫師は實に人を殺すものあり、則ち少數の人を殺して、多數の人を活かすものあり。今眼光を或る一局部に注で之を見よ、醫師は常に多數の人を救はんと欲

して、少數の人を犧牲に供もるに汲々たるに非らずや、然らは則ち之を目して、人を殺すものなりと斷言するに於て、何の不可か之れ有らん、否な寧ろ社會進歩の爲め、醫術發達の爲め、醫師の人を殺すことの多き丈け、夫れ丈け多く之を賀せさる可らず。只無智なる多くの世人は、這般のことを知らす、醫師が病を治することの名譽なるを知て、其人と殺すことの更に名譽たるを知らず、其病を治するの責任重きを知て、其人を殺すの責任更に之より重たを知らも、漫然徒らに曰く、醫師は人を殺すものなりと。寔に醫師い這般の冷語を以て世上に迎へらるゝ、呼人生醫師と爲る豈に難らずや、僕刀圭社會の爲めよ、常に閔々焉たるものあり、能く此嘲罵あきを得む哉。

然れども足下、僕嘗て戰國策を讀む、彼の醫扁鵲が秦武王に見ゆるの一章に至り、大に扁鵲の人と爲りを欣羨しぬ。則ち中に曰へるあり、武王之に病を示す、扁鵲除かんと請ふ、左右曰く、君の病ひ耳の前、目の下に在り、之を除くも未だ必す去る已まさる也、將に耳をして聰ならざらしめ、目をして明あらざらしめんとすと。君以て扁鵲に告ぐ、扁鵲怒て其石を投ぜて曰く、君之を知る者と之を謀り、而して知らさる者と之を敗る、此をして秦國の政を知らしめば、則ち君一舉して而して國を亡さんと。呼何ぞ一に己れの技を賴む

厚く、己れを信ずるの深きや、醫たるもの苟くも常に此心を以て心と爲し、而して己れ有する所の技を揮ふ、天下の毀譽褒貶固と憂ふるに足らざらん也。

今僕を以て足下と見る、足下夙に醫科大學に在て、學理の蘊奥を究め、技術の妙境と探り、爾來之を實地に運用するもの十數年、技術微を穿ち纖に入る、殊に外科術の巧妙あると、我邦醫學士拙かからずと雖も、足下の右に出づるもの鮮と罕れあり、足下已に這般拔群の手腕を以て、刀圭社會に鳴る、何曷ぞ自信以て勇敢果決尚は進んで人を救す、——驀く莫れ僕が所謂人を殺すとに汲々たらざる、聞く足下新刊醫書の出つる毎に、絶へす獨國に注文して之を蒐集し、餘暇あれば常に之を披閲して、新學理を探り、新技術を究むること、決して彼の凡庸醫師の一たび名を得れば、小成に安んずるが如きものゝ儕に非すと。善し寔に善し矣、コッホ彼れも人あり、北里彼れも亦人あり、苟をも勤めて怠らさらむか、天下に名を爲すこと固と易々たらむやと。矧んや足下已に非凡の素を有するをや、又矧んや能く業に勤むるにおてをや、足下乞ふ獨り一地方に名を爲すのみならす、大に天下に令名に馳するあとを勉めよ。

人或は足下の素行に就て難するもの有り、然れとも足下已に風敎道德を以て自ら任とする

人に非す、一任足下の素行に一微瑕ありとするも、固と論するに足らす、否な僕嘗に之を論せさる而已ならす、足下は能く勤め能く遊ふ人とし稱賛せんとす。夫れ能く勤め能く遊べよとは、泰西人の金言あり、苟くも世に立つて一大事業を爲さんとするものは、必らや此金言を守らさるべからす。何とあれば人の腦髓の無制限の勤勉に耐ゆるものに非す、必らすや勤勉の後は睡眠若くは快樂を以て、之に休息を與へさる可らす、即ち能く遊べよとは、之に休息を與へよとの意にして、之に休息を與ふるは、取りも直さす腦髓に新勢力を與へ、再び活潑々の元氣と以て、勤勉に堪ゆるの素を爲すもの、休息は亦一の勤勉に外あらさればあり。然れども世人多くは之を解せす、能く勉むると稱するもいい、夙夜亟々腦髓を過勞して身体を損ひ、能く遊ふを稱するもいい、飽食暖衣徒らに腦髓と痴鈍ならしむ、抑も斯の如き者は能を勉むる者に非す、又能く遊ふものに非す、腦髓を痴鈍ならしむるものい、能く大業を爲すに足らさるは固と論なし、勤勉度を失して腦髓を過勞するものも、亦偉業を爲すに足らさるや明らけし。僕今醫學士たる足下に向つて、這般のことを說くの、猶ほソクラテスに哲理を談するとの一般、頗る烏乎の次第あり、足下只子輿氏の所謂王戰を好む、乞ふ戰と以て之を譬へんと言ひし底の言辭と、同一視せは幸甚ゑ。

乞ふ足下、僕をして今少しく喙舌を皷せしめよ、却說僕已に言へり、休息れ亦一の勤勉に外あらずと、若し此斷按をして誤謬なからしめんか、能く遊ぶは亦是れ能く勤むる者あらさるを得ず、已に能く遊ぶを以て能く勤むるなりとせば、能く勤むる者は亦能く遊ぶものあらん也。僕甞て之と大津病院に在職せし或人に聞く、足下旦に入り夕に退く、此間秒時も徒然に送らず、孜々矻々として職務に勵精す、他の醫員足下と隨つて汲々齷齪たるも、成効足下の半に至らず。而して足下一日の業を畢へて家に歸る、坦然として幾んど職務を忘れたるが如し、獨逸ビールを傾け、マニラを燻ゆらし、時に自動音樂器を弄し、時に自轉車を馳らす、適々意の嚮ふあれば、飄然として去て蘇小が家を叩き、綠酒紅燈以て豪興を極むと。吁足下は斯くの如くにして能く遊ぶ、足下の能く勤むるや、能く遊ぶは其能く勤めんが爲めなり、能く遊ぶは其能く勤めんが爲めなり、僕豈に足下の行爲を稱贊せざらむ哉、然るに世人の此妙諦を知るさるや、足下が屢々車を柳巷に駈るを見て以て、徒らに素行修せらずと爲す、此豈共に倶に論ずるに足らず、足下乞ふ心を安んじて能く勤めよ、而して又能く遊べよ、僕と足下が今より尙ほ一層能く遊はんあとを祈るもの也。

猪飼麻次郎君

滋賀縣商業學校長猪飼麻次郎君足下、僕嘗て公開書翰第一編を著し、前校長岡田逸治郎君に辭職勸告を爲したりき、蓋し岡田君が商業學校長として不適任なることは、獨り僕一家の說のみあらさるを、世人一般の認むる所なればなり。而して第一編刊行後僅かに數日にして、岡田君い屑く校長の任を辭し、足下其後任を襲ふこといなりぬ。聞く足下は夙に慶應義塾を卒業し、爾來前後四年間清國上海に在り、日清貿易研究所の敎師たりしと、其慶應義塾出身と云ひ、又日清貿易研究所の敎師たりし經歷と云ひ、足下を我商業學校に得たるは、深く縣下商業敎育の爲めに之を賀す。次に又足下赴任後直に近江新報を以て、足下が縣下に對する商業敎育れ意見を公にし、縣民をして足下が抱懷する所の方針を窺がはしめたることを謝す。

却說足下は滔々數千言を費ひやし、方今の學士輩徒ふに美ある肩書を有すものい、悉く皆信仰するに足らさると痛論しぬ、僕當時一諾思はす唾壺を破碎したりき、足下寔に言へる如く、方今い尙は未た目明き千人盲目千人の世たるを脫せす、學士とか博士とか稱せば

、單に其名の美に驚て、之を買被るもの比々皆然り、抑彼の學士や博士、固より高尚の學問を修め、專門の學校を卒業せしもの、一個人材たるには相違なし、然れども眞正の人材は、必らずしも大學校を卒業したるものゝみに限らず、村塾時に不世出の人傑を輩出することあり、學士博士にして往々其學識淺膚、才能取るべきあるきもの之れあしとせず、現に本縣商業學校前々校長小川忠武氏の如きは、其肩書ハ文學士あり、而して渠れが在職中、果して何事を爲したるか、其商業學校に盡くしたる功績ハ、實に何物も之れなかりしあり、以て其一班を知るに足る、足下が先づ劈頭第一に這般のおとを喝破して、世人を警醒せしは、大に僕が意を得たるものあり。而して足下又大に商業教育の必要を論し、（前略）今日間々商業學校の生徒にして世に其處を得さる者あるを見て、直に商業教育を云々するは、之を例へば武官に不適任の人あるを見て、兵學の不必用を說き、不熟の醫師あるを觀て、醫學の不要用を說くが如し、是れ其人の罪にして其事の罪にあらず、若し商業學校の好成蹟あきを見ば、小生輩の如き之に從事する者を尤むべし、決して商業教育其物を尤むべからず云々と言へり。以て足下の抱負を知るに足るべく、以て足下が如何に商業教育に熱心せるかを覗ふに足る。僕自今以后足下が如何に我商業學校の振作を圖り、有爲の人材

を彬々輩出せしむるかの伎倆を見ん、足下乞ふ幸に力むる所あれ。

足下又意見書の結尾に至り言へるあり、後來支那に對する我貿易の事に付、聊か卑見を愷き居れば、他日本縣實業家諸先輩に之を啟かん云々と、日清貿易のことは、嘗て荒尾精氏より略ぼ聞く所ありと雖も、足下が實地に觀察せし所を聞くも亦頗る益する所あらん、足下乞ふ亟かに其抱懷する所を公にして、縣下商業者に示せ、至囑々々。

村田源三君

滋賀縣尋常中學校長村田源三君足下、僕過般遊根に遊び、大東代議士を其旅館に訪ひ、中學教育のことに就て共に談論せしことありき。當時代議士は曰へり、本縣尋常中學校の生徒を報紙上に在り、足下定めて之を聞せしあらむ。代議士は曰へり、本縣尋常中學校の生徒を薫陶するや、中等社會の生活を爲すに足るべき學術を、教授するのことい則ち之れ有り、未ざ中等社會の國民たるべき人物を、養成することい之を爲さずと。僕其果して然るや否を知らず、然れども倘し代議士の所謂國家と云へる觀念、我れと云へる思想を有する所の人物を以て、中等社會の國民ありとせば、此事たる獨り我滋賀縣尋常中學校のみあらず、全國各府縣の中學校比々皆お然らざるいあし。思ふに代議士は我縣中學校に於て、最も深く其痛痒を感するの故を以て、偶々此言と爲せしものあらむ歟。

然れども僕は深く信ず、代議士の此言は我國中學教育の弊中、其最も急所を衝きたるものあることとを。其れ我邦今日の現勢は、博識多能の才子拙なたを憂へず、寔ょ愛國盡忠の人材多からざるを憂ふ、語を換へて言へば、學士博士等杉々として、雲の如く輩出するを望まずして、洵に國家と云へる觀念、我れと云へる思想を有せる所の、剛遇不屈の人材續々輩出せんおとを望むに急なり。而して高等中學は如き、又大學の如きは、其目的とする所學者才子を養成するに在つて、人物を養成するに在らず。勿論學者才子中には、剛遇不屈の人材多りるべきに相違あし、只其れ多しとの故を以て、天下の少年子弟を擧けて悉く皆高等中學、若くは大學に入らしめんとするは、剛遇不屈の人材は、都て減ぬ一方學者才子たらざる可らざるも其必要あし、何となれば剛遇不屈の人材は、都て減ぬ一方學者才子たらざる可らざるも必要あければきり。茲に於て乎尋常中學の設けあり、多數の少年子弟をして、小學を卒へし後い隨意之に入學せしめ、各自中等社會の國民たるに適る薫陶を受けしめんとす、必らずしも高等中學若くは大學に入るの階梯として、之を設立せしものに非す、卒業后尚は進んで高尚の學科を修めんと欲するとは、各自の適意あり、要する所尋常中學の設立は、中等社會の國民として有すべき普通の智識を教授せんが爲めに外あらす。左すれば徒らに學科と高尚にして、器械的に學者才子を養成せんとするよりい、寧ろ精神的に剛遇不屈勇猛敢爲、他日社會に立つて爲すあるの人材を養成せさる可らす、此事たる必らすしも僕が饒舌を要せす、校長たる足下夙に之を曉知せん也。然れども心に之を思ふは

易く、口に之を言ふ亦難からず、只之を實行せんこと頗る困難なり、此故を以て全國各府縣の尋常中學に數百の校長あるもの、能く此目的を達するもの數なし、豈に獨り我滋賀縣尋常中學校長たる足下のみならんや。

然れども足下、足下にして若し茲に意あらば、其成功するや否を問はず、請ふ其方針を一定して彼岸に達することを怠らざれ。一任龍を畫て成らざるも蛟たるを失はず、虎を刻して成らざるも豹に類せん也、蛟や豹や固と僕の望む所に非ざるも、之を初めより蛇を畫き、狗を刻せんとするに優ること萬々。要は只剛邁不屈勇猛取爲の材物を養成するに在り、足下得意の柔術を指南するも尚武の一端あり、必らずしも之を變して精神的の薬陶のみを力めとは注文せざるあり、又足下の長所たる米國風を吹くするも可なり、苟くも目的とする方針を誤らされば、僕何ぞ之を尤めん、足下乞ふ目的を以て手段の奴隷さらしむることなく、手段を以て目的の犠牲に供せんことを勉めよ、蓋し大なる過ちなきに庶幾からむ歟。

清水勝定君

新任滋賀縣收稅長清水勝定君足下、足下が曩に岐阜縣收稅長より轉任し來たるや、催にお定りの披露傘遊山巡回を爲せしを聞くのみ、爾來何事を爲しつゝあるかを知るもの寡し、左れは足下を贊美するものもあければ、足下を惡しさまに言ふものもあし、吁足下何ぞ聞へざるの太甚しや。

然れども怪しむ莫れ、收稅長の職たる固と支店の番頭さるに過ぎす、地方の政治に干與するものに非されば、隨て權力もおふう筈はあし。縣民か足下の來るに際し冷情を以て迎へ、足下亦恬然として知らざるものゝ如きは、寧ろ普通のことあらんのみ。

聞く一時全國各府縣收稅長を廢止するの說ありしも、今や事止みになれりと、僕偏に足下の武運長久を賀す、足下乞ふ枕を高ふして安眠せよ、矧んや時季夏日に際し、收稅事務最も閑ありと稱するの時をや。

清水保吉君

滋賀縣技師工學士清水保吉君足下、去七月一日本縣高等官の席次を定めらるゝや、足下は十八名の高等官中知事書記官收稅長の次、第四席に列すること、なり、警部長所參事官（現今は一人なれど）始め其他各郡長を眼下に睨め付けることゝはなりぬ、僕足下の爲めに其榮と賀す。尊て又極田宗壽君の郡長とあるや、足下は其後を襲ふて第二課長となれり、僕重ねて又足下の榮を賀す。

足下は寔に幸運の人なり、曾て先年工學士野澤氏の後任として、足下群馬縣技師より轉任して來れるや、未ざ久しからずして野澤學士が經營慘澹頗る苦心して成就せし、彼の壯大美麗なる愛知川御幸橋は端なく墜落したり、爲めに縣下の一大問題は起れり。足下嘗々たる縣會議場に立つて、而かも意氣泰然完全ある橋梁を架換へんことを盟ひぬ、而して當時議員をして足下が一諾い、實に千金よりも尚ほ重からしめたり。爾來營々工は就れり、其完美亦昔日の比に非ず、橋と共に一旦地に落ちたる學士の信用は、足下よ由て恢復されたり、足下の聲名は益高まれり。勿論足下の技倆は多年の經驗に於て

、野澤氏に優るものあらん、然れども足下にして此好機に投せざりせば、世人の見る所足下も亦野澤氏一般の學士たらんのみ。然らば則ち足下が本縣に來るや、寔に足下の技倆を顯はすの好機たりし也、豈に幸運の人に非ずして何ぞ。

今や足下日の出の勢を以て、縣民よりの歡迎せられ、縣廳部內に在つても亦優遇せらる、僕技術の上に於て、足下の技倆非凡なるを祝し、事務の上に於て、足下の第二課長たるを賀すると同時に、學士として眞正に學士たるれ光彩を輝かせるを、最も賀せずんばあらず足下乞ふ尙ほ進で勉むる所あれ。

西村季知君

西村栗野郡長足下、人間の運命は寔に圖られざるものなり、嘗て往年足下ゞ警察部に小官たりし時ゝ、何人も足下が今日の榮あらんとは思はざりしなり、然れども風雲の足下が身邊を繞ふの繁ある、足下ゝ漸次鴈上りに階一階、段一段と上り詰めて、遂にゝ郡の宰とありぬ。吁人生就くべきは官途なり、掛くべきは失策のあらざらむことなり、學問も勉むるを要せざれば、職務に勉勵するの必要もあし、偶々長官の靴塵を拂ひ、時々鼻息を伺ふに怠らざれば可ならん也。

併し足下ゝ固と這般の人に非ず、十數年一日の如く職務に精勵し、警察部内の字引を以て稱せられ、加之一の失策かかりし結果として、今日の榮を致せしものなるなり、借問す足下願くて幾分か今夕の感あるや否や。

下ゝ兎に角足下は寔に一の好漢あり、僕一の好漢として足下を敬慕すべきことあり、則ち足下人に對して毫も傲るあく、誰遜自ら持し只及ばざらむことを是れ恐るゝが如きは、豈に足下の美德に非すや。古諺に曰く、嗹元過ぎて熱さを忘ると、兎角人間の情として、一たび苦境を脫して樂境に就けば、茫として往事を忘却するもの比々皆然り、足下獨り這般のことなく、昔時小官たりし時の精神を以て、今日の職務に在り、其郡民に對する言行を見る、酷に言へば郡民の意を迎合するに急なりとも稱すべきか、左れど其實は郡宰として郡民を赤子視するに在り、眞摯と熱誠とを捧げて郡民を愛するに在り、備さに辛酸を嘗め來れるものに非されば、苟くも斯くの如くなる能はさらん也。

殊に去七月十八日足下が雨を祈らんとして、官幣甲社建部神社に褒せし時の狀況を見る、足下ゝ正八位栗太野洲郡長西村季知の名を以て、一の祈禱文を朗讀せり。中に曰へるあり、今三日雨らす、五日雨らすんば、郡民れ困厄塗炭よりも酷しきあらん、季知乏を本郡に奉くるを以て、郡民の命は是れ季知の一身に繫れり、季知にして罪科あらば、神の靈威に依り嚴罰に處し、以て郡民の困厄を救護し賜はらんことを云々と。今郡長の職務として天に雨と祈る、鄙稍奇矯に失す、是を以て世人ゝ一珍事として足下を嘲へり、殷湯王に比して足下ゝ劣けりぬ、太甚しきに至つてゝ足下が這般の行爲を以て、是れ郡民に媚ふるあり、如何にも郡民に己れを德とせしめん爲め外觀を衒ふありと、吁何ぞ天世人の足下を誣ゆる太甚しきや、僕豈に一言の足下の爲め冤を雪くあからめやは。

夫れ七月十八日い如何ある日なりしぞ、實に土用入前一日なりしに非すや、これより先き天雨らさるもの三十有餘日、田園水涸れ、稻苗菜草悉く枯死せんとす、是に於てか、足下愛撫の民い呼號叫喚雲霓を望むこと切あり、殊に或村よ於ては水論の結果已に竹槍席旗のさわぎ成あらんとせり。此時に當り郡宰たるもの、縱令足下あらさるも、誰れか袖手傍觀するものあらん、況んや足下の郡民を視る常に赤子の如く、慈愛の切あるものあるに於てをや、一方熱涙を濺で之を鎭撫し、一方血涙を揮つて雨を天に祈る、其至誠熱情こそ寧ろ賞すべけれ、何曷ぞ之を嗤笑すべけむ、吁天下何物の狡兒ぞ之を唾罵する、僕足下の爲めに轉さ憤慨に禁へさらむとす。

勿論郡長の職として雨を祈る、事兒戲よ類し奇矯に失するにい相違なしと雖も、足下が眞摯朴訥ある、至誠溢れて此擧に出づるもの、必らずしも其行爲を見て、其至誠を沒す可らず、曾に之を沒すべからさるのみならす、足下が這般の至誠熱情い、他の平々凡々たる郡宰の摸範と爲すに足るを確信す、吁足下僕い一の愛嬌物一の好漢として、頗る足下の風采を敬慕す、足下乞ふ這般の行爲が、端あく世上の一談柄となりさるを憂ふるあく、尙ほ將來益々此心を擴けて、飽迄も郡民を愛撫せんことを、僕切に之を祈る、僕切に之を祈る。

久保敏樹君

風流郡長足下、聞く足下い元と土陽に在つて政黨員たりしことありと、今や豹變して五斗米に膝を屈しつゝ安眠を貪れり。借問す當年の意氣と如今の意氣と、果して如何の軒輊する所ある、抑も亦心を以て形の役と爲すと、形を以て心の奴隸とするとに於て如何の差別ある。

昔者五柳先生は惆悵獨り悲み、遂に歸去來の辭を爲る。勿論吏と爲つて五斗米に膝を屈す、心を以て形の役と爲すの極、天資剛邁の英氣も消磨すると言ふ迄もなし、然れども巢れをして已往の諫しむまじきを悟て、來者の追ふ可きを知らしめむものい、寔よ田園——一任將に蕪せんとするもれにもせよ、兎に角一家欵口快く口に糊するの此恒產ありされば、人設し罪に巢れの高風を欣慕して、徒らに其顰に倣はんとするが如きことあらむか、是れ烏にして鵜を學ぶもの、遂にい流離顚沛の逆境に陷らん、盤遠からす、近く現時の政黨員輩に在り、僕足下が這般の擧に倣はす、今尙ほ五斗米の爲めに膝を屈して、今日の樂境に在るを賀す。

人い謂ふ吏い俗の最も俗あるものあり、心を以て形の役と爲す之とり太甚しきはあしと、夫れ然り豈に夫れ然らむ哉。足下の如きは吏と謂ふもの丶一郡の宰あり、下に阿ねるの必要は、立憲治世の今日或い之れあらむ、然れとも直接に上に媚びるのことい蓋し尠あかるべし。然らば則ち俗の最も俗ある吏にしても、足下の如きは心を以て形の役と爲すこと、幾んど之れ無かるむ歟、況んや足下が資性頗る風流の思想に富を、其術に在るも第に在るも、手にする所のものは必らずや詩書、而して閑あれば推敲且より暮に至り、意適すれば雲煙龍虵を走らすに於てをや、呼人間爲吏亦風流、古人其れ我を欺かさる也。只惜しむ鍾子期死して伯牙復た琴を弾せず、三橋書記官氏去つて以來足下の詩を見ること罕れまり、世の狡童曰馬て曰く、足下知已を失へるの故に非す、寔に足下の詩を添削するものなけれ丶也と。僕果して其如何を知らす、知らされとも三橋書記官氏去つて以來、足下の詩に傑作あるさい事實まり、之と遺憾とするもの蓋し僕一人のみならさるへし、足下何ぞ道際世人を驚のすの傑作を公にせさる。

◎公開書翰第二編畢

述懷

我歲將三十。　髣髴取次加。
棄繻心尚固。　題柱事堪嗟。
鉛槧僅糊口。　文章未作家。
功名何日遂。　晝錦弄煙霞。

公開書翰第貳編刻成乃錄舊作題卷末

明治廿六年癸巳閏月中浣

於湖南僑居　默軒學人

●公開書翰第壹編に對する批評幷に來翰

◎近江新報の評(西川峽陽君)　默軒學人小川忠之助君頃日「公開書翰」の著あり取て之を閲するに書翰体の新趣向を以て官吏代議士學者奇人扱ては又校書と品す評論奇警峻刻酷吏獄を斷ずるが如し君が筆尖の鋭今更稱せずして可あり其一歩も假借せずして滴々滿腔の熱涙を濺ぎたるは益し適評を失わざるを知る學堂居士曾つて朝野新聞紙上此種の文字を揮つて大に氣焔を吐き江湖の喝采を博したることあり默軒の記する所と學堂の品せし所と其人物の程度に就て其間固より徑庭なきにあらずと雖とも近來一種の快文字たるに至りては其趣を一にせり第二編の如き更に益遠慮會釋あく痛罵骨に達せんことを要す多少の名あるもの丶假面を剝き取るは人に害あくして世ゝ益あり只默軒時に自ら粹士を氣取りて故らに校書輩を挿み戯著に類せしやんとするは何事ぞや之れ予の取らさる所あり

◎桑洲大橋君の來翰　(前略)昨夜吾立教學校學生文學會の催あり教授高橋五郎君の培根論を聽聞して歸りしに受信函中御寄贈之貴著Open letterあり先つ其表紙之字に對して轉足下に接するの思ひを爲し早速拜讀仕ふんと存候得共時已に午后十二点鐘まさに就寢之時刻も過さるにより明日ユックリ拜見せんと心殘して眠に就かんとせしも何とあく氣の濟さるにより眠たき眼を擦りてランプを掻き立て乍失禮寢床の中にて走字形になり讀初先申候處俄に目醒め不覺不知全卷を讀了候時は最早今日の午前一時爲めに今朝い尚眠を貪らんとする己に克て起き出でし時い枕頭の障子にうつゝ日影平素より高きあと凡そ三尺餘、扨一

氣呵成寸鉄人を殺すの妙以て足下ゞ筆硯倍清健あるを證にす大賀々々定めて所揭の名士中にい足下に依て其芳名を天下(些と大厨?)に紹介せられたるを窃に喜び居らるゝ方々も御座候半と存候何い兎もあれ余が第二の故郷に斯くも多く源五郎鮒、ヒガイと一般名士の濟々たるにい余も窃に喜び居申候乍去余は茲に一の憾とすへきあり何そや彼の惡むへき校書輩が此等堂々たる名士(?)と肩ゝ列ね居ることなきたとひ人い是れ萬緑叢中紅一点亦愛嬌ありと云ふとも余は將さに晴空一点の暗雲、趙璧の瑕瑾ありと云いんとす君以て如何となす

君よ余は願ふ君が只是に止らずして其様大の筆を揮ふて眞面目に天下の人物を論せんことを至嘱々々先は御禮迄如斯に御座候頓首

六月四日　　在東京　大橋桑洲生拜

小川默軒様

研北

◎至極同感生の來翰　草津郵便局の消印ある端書を以て左の如く忠告し來れるものあり

三日の新報紙上默軒先生公開書翰の批評を載す白面の余荒言ふだけ野暮なりと雖末段校書を許するを歎する處至極同感あり二編以後切にこれ無からんを望む思ふに峽陽先生と感を同ふする者は余のみに非ざる可し

六月四日　　默軒先生梧下　　亜極同感生

◎佩香女史の詩　佩香女史萩原氏より左の一詩を寄せらる

柔腸猶未脫兒嬉　標格何如張氏姨
粧閣代箴風刺筆　一枝頭上白薔薇

萩原絨々拜草

默軒先生

●公開書翰第壹編正誤

第四十九頁十行目(Ocen)は(Osen)の誤

稟告

不肖自ら圖らずして漫りに縣下諸君子乃論評を試む潛越け罪尊嚴を冒すの咎素と遁かるゝ所を知らざる幸ま諸君子江海の宏量を以て寛恕せられんことを序に本書第一編發兌以來大方諸君子の愛讀を辱ふし且つ諭とすに惇々の言を以てせらるゝ不肖乃歡喜將た何物か施ま若かん希くは本編亦論評の不可なるもの及び措辭の妥當ならざるものの如らは遠慮なく教を垂れらるゝことを謹て白す

明治二十六年八月十五日

默軒學人

廣告

默軒學人著

公開書翰 第壹編

定價金拾錢

目次

大越亨君　江龍清雄君
林田勝九郎君　東義徹君
松岡逸治郎君　寺原長輝君
田宗遠藤謙君　川路利恭君
遠藤宗吉君　族島丁穏君
中村不能齋君　上孚光君
中邑庄五郎君　村専治君
谷口おせん女史　佩香君
磯部鮑吉君　河藤田治郎右衛門君

この書一たび編まれは龍驤り虎嘯き実に千古に卓り而生ず乍にして電光閃々忽にして雷鳴隠々をしと幾んと魂魄を動かし魄を奪ふの想わらしむや江湖の大喝采を博し第一版一千部も貴ふ尽くし更に第二版を刷行するに迫ふ大方の諸彦乞ふ急遽購求あらんあとを

発行所　井筒商店
賣捌所　各地新聞雑誌舗

草津

明治二十六年八月十日印刷
明治廿六年八月十五日發行　（實價金拾錢）

滋賀縣滋賀郡大津町大字馬場第十八番屋敷寄留

著作者　小川忠之助

滋賀縣栗太郡草津村大字草津第四百三十一番屋敷

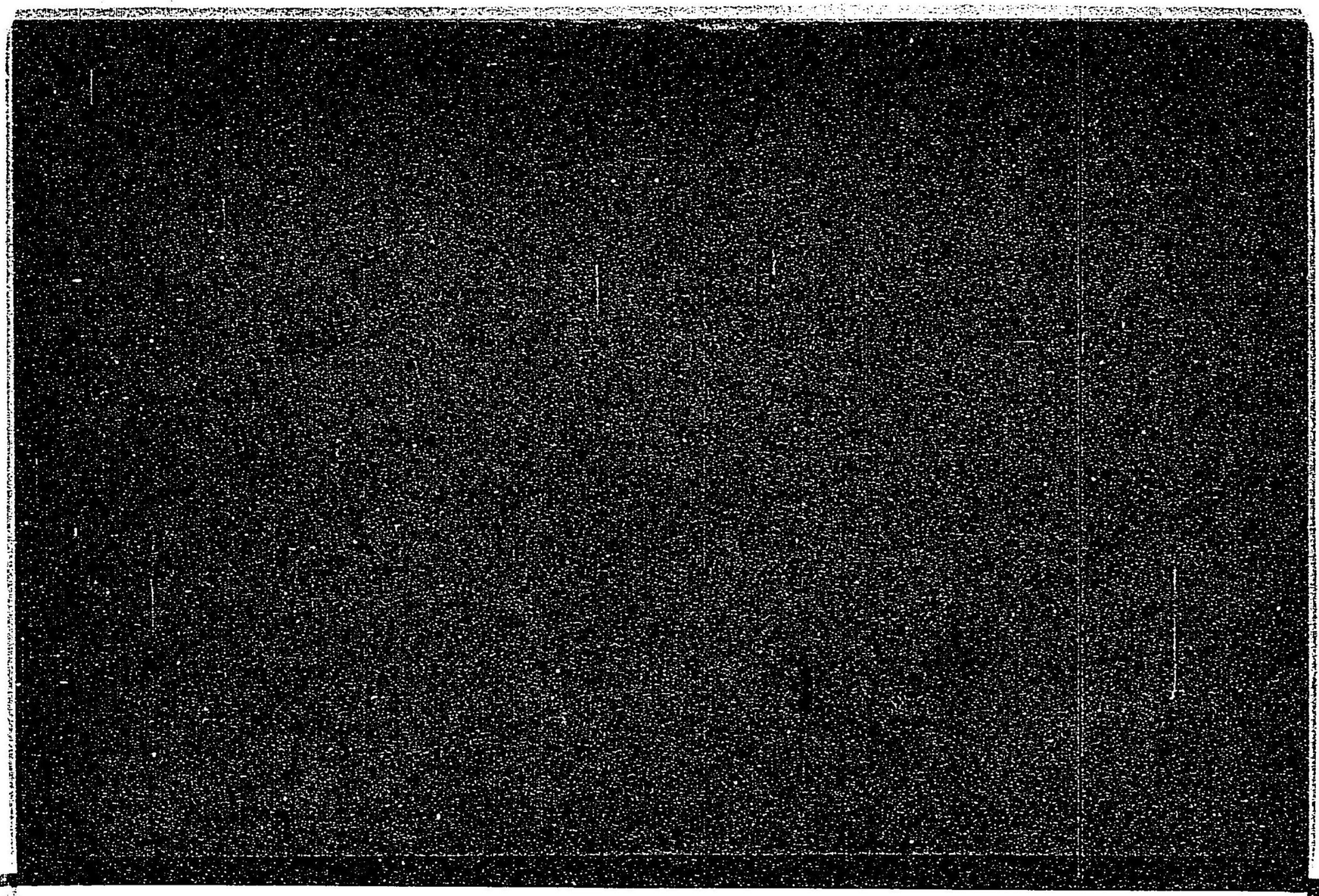
發行兼印刷者　恒川嘉三郎

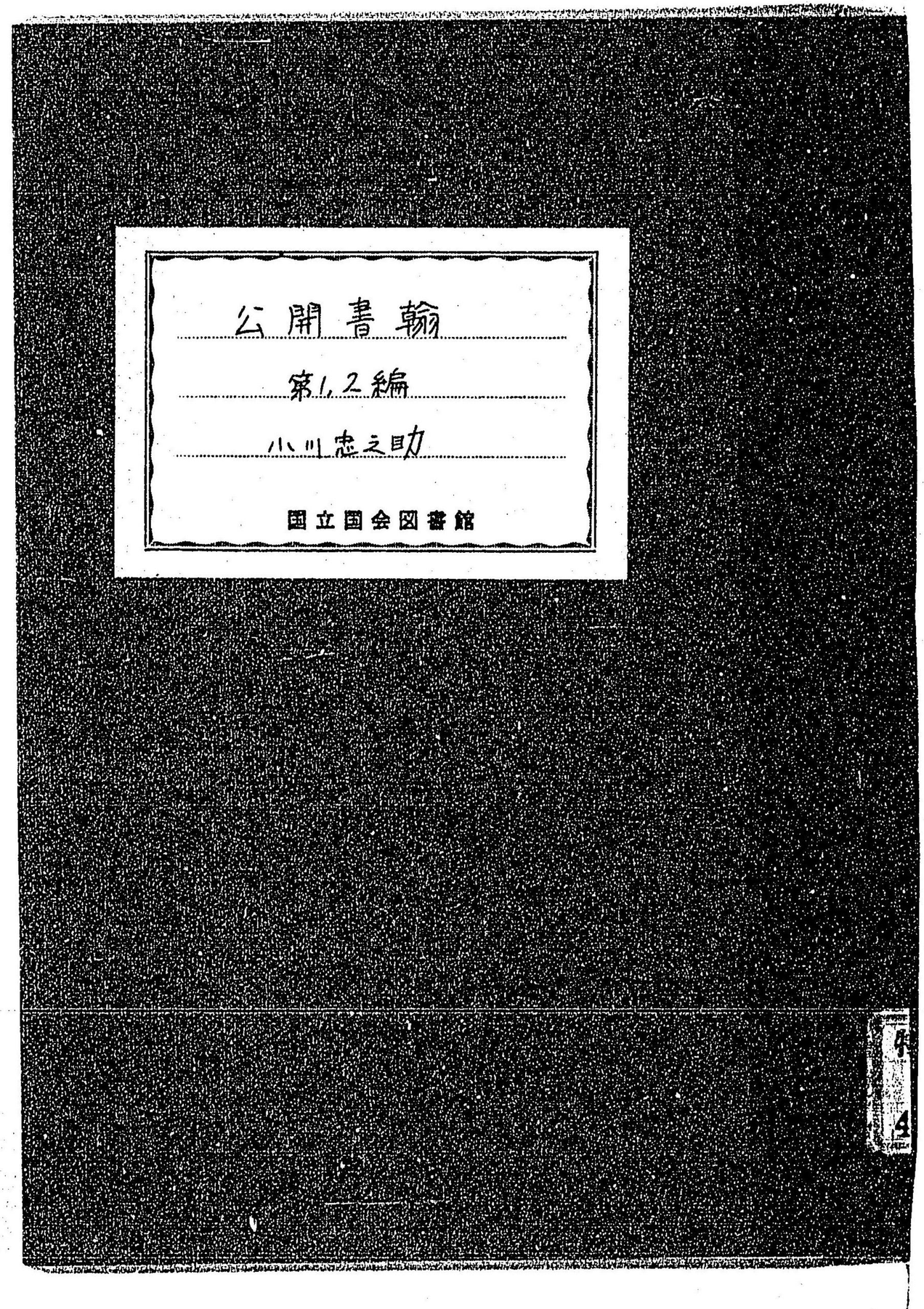
滋賀縣滋賀郡大津町大字桝屋第卅二番屋敷

印刷所　桝屋町活版所

近江草津三丁目

發行所　井筒商店





004358-000-0

特18-429

公開書翰

小川　忠之助／著

M26

ACE-0805